
COBALT-SERIES
鬱金の暁闇14
うこんのぎょうあん
破妖の剣6
前田珠子
イラスト／小島 榊
集英社



COBALT-SERIES

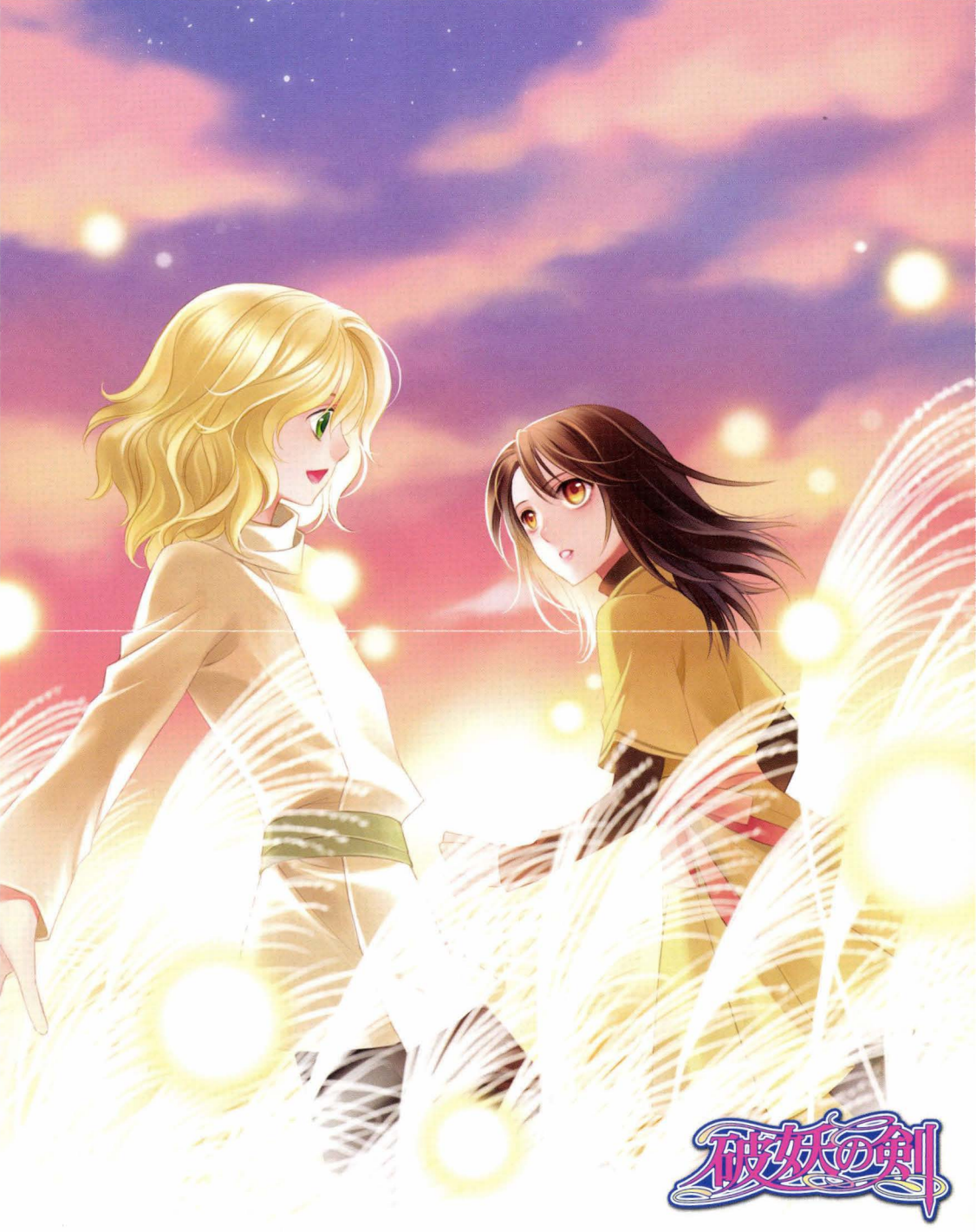
破妖の剣　6

鬱金の暁闇 14

前田珠子

集英社


破妖の剣


破妖の剣



COBALT-SERIES

破妖の剣（はよう つるぎ） 6

鬱金の暁闇（うこん ぎょうあん）14

前田珠子

集英社

目次

鬱金の暁闇 14

第四十三章　扉は閉じず …… 13
第四十四章　蜘蛛の糸のごとく …… 59
第四十五章　二つの鍵（前） …… 97
危うすぎる薔薇のような …… 125
あとがき …… 199

破妖の剣　鬱金の暁闇

これまでのあらすじ

創造神ガンダルの生み出した世界、ガンダル・アルス。人々は複数の命と強大な力を持つ魔性たちに脅かされていた。彼らに対抗できる力を持つ人間たち――封魔の力を持つ捕縛師、滅魔の剣に選ばれた破妖剣士、魔性を味方に引き入れる力を持つ魅縛師――が「浮城」に集い、魔性との戦いに尽力していた。

ラエスリール(ラス)は、金の妖主を父に、かつて城長だった魅縛師を母に持つ少女。浮城屈指の破妖刀「紅蓮姫」に選ばれた彼女は破妖剣士として著しい活躍をするが、闇主という謎の魔性に愛され翻弄され、魔性として生きることを選んだ弟・乱華には歪んだ執着心で追いかけられ、彼女はなにかと切れぬ絆や因縁がつきまとうのだった。

この世に五人しかいない妖主の一人、翡翠の妖主を滅ぼしたラスは、父の配下の魔性や紅蓮姫奪還チームに追われ、護り手の闇主とともに逃亡していた。しかし父によって仮死状態にされ、その肉体は紅蓮姫の「鞘」として浮城最奥に収められ、永い眠りにつく。その後紅蓮姫の第二の使い手として、奪還チームの一人であるアーゼンターラが選ばれる。そんななか第六の妖主（雛の君）が誕生。次々に妖主たちを配下に従え、世界を破滅へ導こうとしていた。母チェリクによってラスの意識は永い眠りから目覚め、肉体へ戻る。しかしラスの努力むなしく、雛の君は世界の破滅を導く『破壊の鍵』を取り出すことに成功してしまう。ラスは紅蓮姫を携えて雛の君に対峙するが、そこに現れたのは弟の身体に入った実父・金の妖主だった！　父に刃を向けることをためらっていたラスも遂に迷いを捨て、父の心臓に紅蓮姫を突き立てる…!!

妖主たち

金 **王蜜の妖主**
ラスの父。最愛の妻を亡くして以来、姿を消す。

赤 **柘榴の妖主**
クセ者ぞろいの妖主たちの中でもかなりの強者。

緑 **翡翠の妖主**
夢に通じる力を持つ。ラスによって滅ぼされる。

白 **白焔の妖主(白煉)**
熱に通じる力を持つ。一時期人間だった。



紫 **紫紺の妖主(藍絲)**
糸に通じる力を持つ。白煉に執着している。

夫婦?

第六の妖主(雛の君)
緑の妖主の死により現れた新しい妖主なのだが…。

娘

息子



ラエスリール(ラス)
破妖刀「紅蓮姫」の使い手。半人半妖で魅了眼を持つ。不器用な性格。



アーゼンターラ(ターラ)
現在「紅蓮姫」の使い手だが、悩みも深い。

リメラトーン(トーン)
妖貴の大火で生き別れになっていたターラの弟。

姉弟

オルグァン
破妖剣士。「氷結斬」と呼ばれる破妖の斧を使う。



スラヴィエーラ
破妖刀「夢晶結」を操る、破妖剣士の少女。

マイタード
捕縛師。自らの刺青に魔性の命を封じ込める。

懐いている



邪羅(ザハト)
妖主夫婦の息子で、ラスを姉のように慕う。

紅蓮姫奪還チーム

破妖の剣 人物相関図

チェリク
浮城の元城長で、伝説的魅縛師だが妖主と結婚。

親友

夫婦

息子



マンスラム
浮城の前城長。ラスを養女として育てた。



濫花（リー）
ラスが拾った半人半妖の少年。乱華に酷似。

懐いている

乱華（リーダイル）
ラスの弟。魔性として生きる超弩級のシスコン。

アーヴィヌス
現在の城長。かつては捕縛師として活躍した。



護り手

闇主（千禍）
ラスの護り手。壮絶な美しさと極悪非道な性格は魔性のなかでも群を抜く。



セスラン
捕縛師。人あたりはいいが、実は食わせ者!?

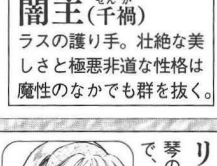


彩糸
リーヴシェランを溺愛する美しく聡明な護り手。



サティン
面倒見のよい捕縛師。ラスの姉のような存在。

護り手



リーヴシェラン
琴の音を用いる魅縛師で、気の強い美少女。

いいかんじ？

浮城における ラスの理解者たち

イラスト／小島　榊

第四十三章　扉は閉じず

1

想定外の出来事というものは、最悪の事態を予測し、準備することで減らすことができる。
浮城の住人――特に経験を積んだ者にとって、それは常識であり、備えるべきことである。
魔性相手に戦いを挑むのだ、いかなる不測の事態が起きないとも限らない。
その事態に対応できなければ、命の危険に直結する。
自分の命はもちろん、周囲の、魔性に対抗する術など持ち合わせていない者たちの命が危険に晒される。
だからこそ、浮城は、魔性被害が生じた場所の情報を隈無く調べ上げるのだ。
上層部はその情報を把握した上で、最適と思われる人員を派遣する。
派遣が決められた者たちは、集められた情報の全てを受け取り、その内容を解析した上で、懸念されることも含めた対応策まで練った上で行動に移る。

これは、浮城が新人教育において徹底的にたたき込む基本中の基本と呼べるものだった。

魔性が相手では、人間に完全なる予測は不可能であり、ある程度の情報があるとはいえ、最後の最後で何を仕掛けてくるかわからないのが魔性という生き物――否、同種である人間が相手であっても、そうしたことは往々にしてあるのだから、魔性が相手ならその倍以上は用心すべきだという指標なのである。

とはいえ、これはいわば基本中の基本と呼べるものだ。

経験を積んでいくうちに、彼らの中には独自の感覚で判断するようになる者もいる。

セスランもそのひとりだった。

もともとが、封魔具ではなく自身の肉体に魔性の命を封じるという、浮城にあってすら非常識な異能の持ち主である。

体内に魔性の命を宿すなど、本来人間には不可能な業であるのだが、彼の特殊な出生がそれを可能にしていた。

捕縛師であった母の資質が、彼の肉体に封じられた魔性の魂を逃さない――さらには、世界に五十人といわれる漆黒の上級魔性、妖貴を父に持つがゆえに、封じられた魔性たちは、よほどのことでもない限り、彼を内部から食い破ってでも解放されようとはしないのだ。

まあ、過去に一度だけ、その「よほどのこと」は起こったのだが。

魔性は、より強い存在の命に従う——強いこだわりを持ち、主と定めた相手以外には殺されようとも従わぬという「主持ち」の妖貴でもない限り、力に重きを置く魔性は、力量次第で従う相手を替える。

以前、セスランの肉体に封じられた魔性たちに、「内側から食い破る勢いで暴れろ」と命じたのは——父以上に強大な魔性だった。

それもそのはず、柘榴の妖主の命令の前にあっては——たとえそれが戯れに過ぎないとしても——妖貴である父の命などひとたまりもない。

だが、その騒ぎは一段落し、彼の内部に封じられた魔性たちは再び静かに彼の中に封じられる現実を受け入れた。

あれから、何年が経つのだろう。

一生に一度味わえば充分だと思えるほどの「内側から食い破られる苦痛」は、数年を経て再びセスランを苛んでいた。

それは、数年前、柘榴の妖主が命じた時以上の激しさでセスランを痛めつける。

あの時、彼の内部に封じられた魔性たちに、「好きなだけ暴れろ」と告げたのは、彼らの主

ではない、上位者たる立場にある柘榴の妖主だった。
いや、正確に言えば、「柘榴の妖主」と同じ命と力を持つ、だが仮初めの存在だった。
だが、今――。
セスランの体内に封じられた妖鬼たちが暴れているのは、そんな仮初めの主が命じたがゆえではない。
世界の真なる王――魔性における最高位に位置する女皇が、全世界の魔性に放った宣言によるものなのだ。
自分が生み出す新たな世に、人間の存在は生まれない――故に遊ぶなら今のうちだと。
今しか、人間で遊ぶ時間は与えられないのだと、残酷なまでにはっきりと宣言した女皇の言葉に、魔性たちが反応している。
完全に封じ、無力化したはずの魔性たちが――。
わたしとしたことが、読み違えたか……。
内部で暴れる魔性の息吹を感じながら、セスランはその場に膝をつき、息を整えた。
女皇の宣言は、どうやら自分が思う以上の威力を以て、世界中の魔性の意識に浸透したらしい……。

たったひとりの、ただ一言の――。

これまで、世界に対して何ら力を提示したこともない少女の放った一言に、なぜこれほどの威力があるのか、セスランには理解できない。

妖主たちの誰かが放った一言だったというのならわかる。

世界が作られた瞬間から、妖主はこの世界とともにあった。人間が生まれたのがそのずっと後のことだったことを、セスランは知っている。

だから、妖主の誰かが同じことを宣言したのであれば、世界中の魔性たちが従うのも理解できなくないと思ったのだ。

だが――宣言したのは、生まれて間もない赤子のような、最後に生まれた妖主。

なぜだと思うより先に、どうしてと思うより先に、セスランの脳裏に浮かんだのは「納得などできるものか！」という、強烈な拒否感だった！

セスランはずっと、人間と魔性の間に生まれたがゆえに、世界をふたつの視点から眺める立場に縛られ続けていた。

たとえ人間の側に立つことを選択したとしても、その立ち位置、その視点は、常に彼に付随し離れるものではなかった。

人間は時にその弱さを盾にする。
魔性は時に人間以上に純粋な想いの発露を見せる。
世界は人間のものか、あるいは魔性のものか。
考えれば考えるだけわからなくなる——人間は確かに弱い。
魔性に対抗し得ないほどに弱い。
だが、その弱さゆえに知恵を働かせ、時に魔性を出し抜くことさえ可能とする。
逆に魔性のごく一部は、人間が失って久しい純粋さゆえにその力を——命をかけて行使することもある。
このガンダル・アルスにあって、正しい反応を示しているのは、果たして人間なのか、魔性なのか——。
セスランが密かに抱いた問いは、決して誰にも打ち明けられないものだった。
魔性と人間の間に生まれた彼だからこそ覚えた疑問は、しかしそれゆえに彼が属する人間の世界にあっては禁断のものだった。
口にしてはならない。
浮城を終の棲家に決めてすぐ、そう決意したセスランはだから、胸中に湧き上がった問いを

誰にも悟らせず封じることを決めた。

まさか……間違って人間に生まれたとしか思えない化け物だとか、その化け物と平気でつきあえる、やはり人外としか呼びようのない精神形態を持つバケモノとかが、同時期にふたりも存在できるほど……それを許容できるほど、浮城の懐が深いとは想像もしていなかったのだ。

そう……世界というものは、セスランが思う以上にあらゆるものに寛大にできていた。

人間の身に生まれながら、その意識は限りなく魔性に近い女性が平気で浮城で生きており、その傍らには人間以外の何物でもあり得ない身でありながら、その女性とごくごく自然につきあえる胆力の持ち主がある。

そして、彼女たちに好意で以て従う魔性たちがいる。

浮城はまるで、世界を凝縮した上でさらに混沌という調味料を加えた坩堝のようだ。

世界中のあらゆる所で、魔性は人間を傷つけ、死に至らしめている。

だが、ほんの僅かではあるが、魔性が人間側に寄り添うこともある。

魔性は、本当に人間にとって脅威でしかないのか——互いに歩み寄る余地はかけらもないのか。

セスランは自らの出生ゆえに、ずっと考え続けてきた。

自分を含む魔性と人間の間に生まれた命には、どんな意味があるのか――それとも、戯れの果てに生まれたものに意味などないのか。

魅縛師による力が底にあるとはいえ、魔性と人間の共存が当たり前となっている浮城の在り方は、世界にあっては異端に過ぎないのか、それとも未来への希望となり得る可能性を秘めているのか。

前者であれば、浮城は世界にとって、人間へ与えられた気休めにすぎないのか。

後者であれば、今はまだ見えない共存への道が隠されているということなのか。

答えは――未だに見つからない。

見つけるために、セスランは自身に取り込んだ魔性たちの意志を奪わなかった。戦闘中に内部で暴れられては任務に支障が生じると思い、彼らの力は無力化したものの、自らの抱く疑問への手がかりを得るために、その意志だけは奪わずにいた。

彼らが何をどう感じ、何をどう思うのか――知ることを優先した結果、そういうことになったのだ。

だが――。

失敗した。

そう思わずにはいられない。

女皇の宣言と命は、圧倒的な強さで、セスランのなかに封じられた魔性たちを衝き動かしている。

次の世に、人間は存在しない。

女皇の宣言に迷いはかけらもない。

そして、それゆえに、世界中の魔性はその言葉を受け入れる――一片の疑問さえ差し挟むことなく！

セスランの内部に吹き荒れる嵐は、今や最高潮に達しようとしていた――封じられた魔性たちが、女皇の言葉に従い、今しか味わえない快楽を求めて彼という存在を食い破ろうとしているのだ！

させるものか！

セスランは歯を食いしばり、必死に力を振り絞った。

その力は、外部へではなく、内部へ注ぎ込むべきものだ――これまで、セスランの体内に封じられた我が身大事とばかりに、彼を結果的に守ってくれてきた魔性たちの意志は、今や完全に敵に回っていた。

彼らの好きにさせるわけにはいかない。
傍目にはわからない、熾烈な戦いを覚悟した上で、セスランは彼らの挑戦を受けた。
その身に封じた妖鬼の数はおおよそ五十――これまで封じてきた総数ではない。
封じてなお、彼の中で暴れ続ける荒ぶる魂たちだ。
させない――させて、たまるものか！
意志を固めて、セスランは内部の暴れる嵐に向き合おうとした。
その、まさに……刹那。
雷撃にも似た衝撃が、彼を襲った。
「おや、外れてしまったか」
残念そうな声を上げながら、だが全然そう思っていないことが明らかな顔をした漆黒の魔性が彼の目の前に現れたのだ！
漆黒の髪、漆黒の瞳――世界に五十人しかいないといわれる上級魔性。
妖貴。
そのひとりに違いない男が、漆黒の双眸をきらめかせながらセスランの目の前で楽しげにうそぶいた。

「お前の中からは、わたしが保護すべき弱き眷属の気配がする。人間に過ぎぬ身では抱えきれぬほどの命が、お前の中から解放を願って叫んでいる。お前の半分が我らと同じものであることは疑いようがない……なのに、お前は世界の主に従おうとしていない。なぜだ？　なぜ、お前は女皇に従わない？」

青年が、答えなどはなから求めていないことを、セスランは悟っていた。

息が詰まる。

女皇の命に従わぬ不遜の輩の命を刈り取る――はなからそのつもりで、妖貴はこの場に現れたのだ。

セスランに、護り手はいない。

問答無用で側に集まる魔性の命を体内に取り込む彼に、そんな存在はあり得ない。

彼の命を繋いできたのは、これまで彼が有無を言わさず自らに封じてきた魔性の力と生命力だ。

だが、それらはこの機会を得て、セスランを内側から食い破ろうとしている。

そこに現れた、この妖貴だ。

死ぬか。

生きることを諦めたわけではない、生きるために抗うことを放棄したわけでもない。
最期の瞬間まで、生きるために戦うことはセスランが自らに定めたことだ。それでも――。
この状況下で、この妖貴を相手に生き残ることは難しい。
これまで封じてきた妖鬼の命と意志は、目前の妖貴に委ねられている。
自分の内側に宿る力も、外側から得られる力も、どちらも相手に握られている。
絶望的な状況だ。
それでも――そんな状況にもかかわらず、彼は思った。
死ねるものか、と。
特異な、まるで勝手にこちらの寿命を引き延ばすかのような異能に不満を覚えたことは限りなくあった。
誰が助かりたいと言った。
誰が生き延びたいと言った。
運命が勝手に延ばした命と運命に、心から感謝したことなど、実のところ幾度しかない。
そう思うきっかけとなったのは、自分以上に数奇な運命の下に生まれた少女を見つけたこと。
自分以上に過酷な運命を押しつけられた少女の存在を知った。

彼女を前に、自分に何が言えるのか。
世界を破滅させる力さえ秘めながら、必死にその力から世界を守ろうとする意志を感じ取りながら――。
できるわけがない。
この程度の圧力に屈することなどできるはずが――！
ラス――ラエスリール。
君はわたしによって救われたと思っているかもしれない。
だが、真実は真逆なのだと、いつか悟る日がくるだろうか。
世界を壊すだけの力を秘めた雛鳥が、怯えて震えながらこの懐に飛び込んできたあの日、君を抱き留めながらわたしがどれほど歓喜の念を覚えたか、きっと君は知らない。
君は、その存在だけで世界を圧倒する輝きに満ちていた――自分はすぐそばにいたおかげで、それに気づけただけだ。
わたしは、いつだって――。
今は遠くにいる教え子を思い、セスランがさらなる言葉を紡ごうとした時のことだった。
突然、分け入るような声が響き渡ったのは――。

「わたしを前にして雑念を抱けるとは感心だな」
声を荒らげるわけではない。
ただ告げるだけの声が、セスランの全身に圧力をもたらした。
これが、本気を出した妖貴の力か――。
その声の響きだけで、身を食い破られる勢いを感じた。
押さえきれない――食い破られる！
そう、確信した。
目前に現れた妖貴の命により、セスランの体内に宿る魔性たちは残らず反旗を翻し、結果彼の命は霧消する。
その、確信。
そう覚えるだけの衝撃。
それを、確かにセスランは覚えた。
だのに、無傷に済んだこの事実こそが信じられない。
何が起こった？
否、何が我が身に宿るモノたちを押しとどめたのか。

困惑するセスランの耳に、新たな声が飛び込んでくる。

「無様な姿をさらすでない」

淡々とした――どこまでも静かな、だが確かに聞き覚えのある声が。

まさか。

最後に聞いたのはいつのことだったか――遠い、遠い過去へ意識が引きずり戻される。

それも無理はない。かのひとの声を最後に聞いたのは、浮城へ赴くよりずっと前の、母が亡くなった時だったのだから。

『命ひとつに減じても、先に逝かれる運命に変わりはなかったか……』

残される者たちに対する最後の意地とばかりに、満身創痍にもかかわらず、顔だけは無傷だった母の遺体を前に、そう呟いた姿を目にしたのが、そのひとに関するセスランの最後の記憶だった。

二度と会うことはあるまいと、なぜか信じていた、そのひとの――。

姿も声も、別れたあの日から何一つ変わっていない――凄まじいまでの美貌も美声も、そのたたずまいまでも、あの日あの時そのままに。

現れたそのひとの姿を、セスランは呆然として、見つめた。

「……父上……？」
数十年ぶりの親子の再会だった――。

2

セスランの母親であるシャイレンは、実に思い切りのいい性格の主だった。

浮城で捕縛師の資格を取った彼女が、熟練の封魔具師に依頼した封魔具からもそれは明白である。

彼女は、自分のための封魔具を発注するにあたり、自らの生涯にわたって発揮し得る捕縛力を試算させた挙句、それを九十九個の真球の水晶玉に凝縮させたのだ。

いかなる強大な魔性の命であっても、一粒の水晶に必ずひとつの命を封じられるように——無限にも近い捕縛力を封じた水晶を用意させた。

九十九個となったのは、彼女が狙ったものではない。封魔具師が読み取った彼女の全能力を宿す水晶玉の数が、偶然そうなったというだけのことだ。

魔性命ひとつに、必ず一粒の水晶は白濁する。

小鬼なら、大抵ふたつ、妖鬼なら三つの命を持っている。
単純計算でいけば、彼女の封魔具は妖鬼三十三体を封じたところで打ち止めとなり、彼女はそこで捕縛師としての寿命を終える。
……あまり、効率のいいやり方ではない、常識に通じた方法とは思えない。もっともそう感じた時、セスランはまだ五歳であったから、彼もまた常識からはかけ離れた存在ではあったのだけれど。
そう、セスランは異常に早熟な子供だった。
破天荒な母親でさえ、「あなたの年頃で異端視されても何一つ、いいことなんてないんだから、普段は猫を被ってなさい」と言うほどに。
そんな彼が放った問いかけは、やはり五歳児のものではなかった。
「なぜ、そんな効率の悪い方法を選んだの？」
妖鬼とか小鬼とかの命は、封じるのにさほど力を要するものではない——恐ろしいことに、五歳児であったセスランは命の力量を正確に見極める目を持っていた。
そんな彼にとって、母がかつて選んだやり方は、非効率この上ないものに映ったのだ。
だから、問うた。

母の返答は、当時の彼には理解不能なものだった。

「だって、これなら万が一妖貴に出くわしても、充分対抗できるか、少なくとも逃げる余裕を作るぐらいの打撃は与えられるって、封魔具師が言ったのよ」

妖貴――上級魔性である妖貴が、人間社会に関与する可能性は限りなく低いと言われている中、どうして妖貴を想定した封魔具を選択する必要があったのか。

早熟すぎる天才児――両親も本人も、一切その認識はなかったが――の疑問に、しかし母はあっさりと答えた。

「人間万事塞翁が馬よ」

そうして、こうも付け加えた。

「大体、一生魔性相手に戦うつもりもなかったのよ、私は。あの鬼母との縁を切りたい一心で浮城に入ったんだし、九十九個の水晶玉を手に入れた時だって、当時は年に一度か二度の出動が当たり前だったし、それなら年間三個から六個の消耗で、まあ、もっと多い時のことを考えても十年ぐらい働いたら、能力の枯渇を理由に浮城を円満引退って思っていたし」

もっとも、その半分もいかないうちに使い切ってしまっちゃったけどねえ。

異様な五歳児に対する母親の答えは、やはり普通ではなかった――その父親が、さらに非常

識であり、そんな男を伴侶に選んだわけだから、無理からぬことではあったのだが。

「でも、私の最初の決断は間違っていなかったと、今でも思ってる」

そう言って、シャイレンは幼いセスランを抱きしめた。

「あなたの言うように、封魔具の数を増やすために、封じられる力量に限界なんて設定してたら、絶対……言い切ってもいいけど、あなたのお父さまを捕まえることなんかできなかったわ。確信を持って言い切れるけど、絶対惨殺されておしまいだった……だから、あなたは私の決断に感謝するべきなのよ。私があのひとの命のほとんどを封じたおかげで、あのひとはほんの少しとはいえ、有限の命というものへの関心を覚えたのだから」

残された命がふたつ以上あったら、もしかしたら私に興味なんて覚えなかったかもしれないわよね――そうしたら、あなただって生まれていなかったのよ。

ものすごく高度な魔性封じの術の話と、夫婦げんかの愚痴を一緒くたに語られたセスランはいい迷惑だった。

すこぶる早熟だったとはいえ、それは知識的な部分でのことだ――情緒的な問題で愚痴られるのは彼にとっても負担の大きいことだった。

困惑は大きく、それを隠せるほどセスランも成熟してはいなかった。

「あのー」

何と答えていいのか迷うブロンズの髪の我が子に、シャイレンは構わず告げた。

「私がまあ、極度の面食いだったことはさておいても、私の選択やその結果生じた事象には必ず意味があるはずよ。魔性がこの世界の支配者であるならば、あなたは生まれてこなかったはずだもの……考えたくはないけれど、あのひとが単に興味深い玩具としてしか私を見なかったならば、あなたという存在はこの世に生まれ落ちることはなかった。親から見ても異常に早熟で、それだけにとても心配なのだけれど、あなたは確かに私とあのひとの命を継いで生まれてきた子供だわ。そんな存在が生まれ落ちるということが、この世界にとってありふれた、どうでもいいことのはずがない。あなただけでは無理かもしれない……けれど、あなたが生まれたことで、確実にこれまでの世界の在り方は震わされたのよ」

当時五歳児に過ぎないセスランに、このシャイレンの言葉は難解に過ぎた。

最後の言葉があまりにふざけすぎていて、すっかり忘れてしまっていたが、シャイレンはセスランにことあるごとに、それぞれ内容の異なる難解な言葉を紡いでいた。

普通に考えるなら、それらはもっと後――セスランが充分に理解できる年齢に達した後にこそ伝えるべき言葉と内容だったが、彼女は頓着しなかった。

気が向いたタイミングで、セスランの状況などお構いなしに、雨のように浴びせかけた。おかげでセスランにとっての母の印象は、突然意味不明なことばかり言い出すひと――の一語に尽きる。

死ぬ寸前の言葉も酷かった。

「この場に来ないということは、あなたのことは私の好きにしろっていうことだろうから、あのひとのことは当てにしないように。そうなると、まだ幼いあなたは保護者を必要とするだろうから、選択肢はふたつね。ひとつは私の母――あなたの実の祖母だけど……お勧めできないわ。もうひとつは浮城ね。上司や同僚がまだ現役で働いているはずだから、何とかなるとは思うけど、あなたの出生を思うと、素直に受け入れてくれるかどうかは怪しいわねえ」

いくら早熟だとはいえ、十に満たない子供を残していく母親の台詞として、これはどうだろう――。

そして、最期の最期の言葉は、本当に無責任というか、ある意味セスランの意志のみを尊重するもので――「まあ、好きにしなさいな」と、笑いながら告げられた彼の心理はかなり複雑だった。

母の予想に反して、父は間もなく姿を現してくれたものの、洩らされた台詞は前述のもので

あり、しかもすぐに姿を消してしまった。

これは母同様「好きにしろ」ということだと判断するしかなかったセスランが、「お勧めできない」と母が言い切った祖母を最初に頼ろうとしたのは、血縁の愛情に焦がれていたから——では断じてない。

一般的とは口が裂けても言えない両親ではあったが、セスランは愛されていないと感じたことはなかったのだ。……まあ、もう少しわかりやすく示してくれれば、性格に捻りが入ることはなかったろうな、とは思いはするが。

最初に祖母を頼ってみたのは、あの母が「勧められない」と言った祖母がどんなひとであるのかを知りたいと思ったからだ。あの口ぶりからして、魔性と禁断の恋に落ちた娘を絶縁した母親、とは考えにくい。

この先も全く無縁で過ごせれば問題はなかろうが、世界はどこでなにがどう繋がっているかわからない。

ならば、この先必要な注意事項を確認するためにも、祖母の為人を知っておくべきだと思ったのだ——彼は早熟なだけでなく、可愛げのないすれた子供でもあった。

だが、彼の選んだ道は間違ってはいなかった。

訪ねた祖母は、金という名の唯一神の熱烈な信奉者だった。

それを隠そうともしない言動は、ある意味潔いと言っていいかもしれないものではあったが……「その綺麗な顔をこの婆のために使ってくれる気はあるのかい？　それとも、顔以外にも取り柄はあるのかい？」という、開口一番の問いかけにはさすがに面食らった。

強烈な上、当時まだ充分若かった祖母は、セスランの全身を値踏みするような目でなめ回した——セスランがもっと鈍くとも、この女性のそばにいれば必ず、彼女の唯一神への信奉の贄にされると悟ったに違いないあからさまな視線だった。

なるほど、あの母をして「勧められない」と断言させた相手だと得心がいった。

ならば、残る道は浮城の門をたたくしかない。

こちらの道も容易くないことは知れていたが、それでもいつ、どんな変態に売り渡されるか戦々恐々として過ごす日々を送るよりはましだと思ったのだ。

普通の人間に紛れて暮らすという選択肢は最初からなかった。

セスランの肉体の成長速度が、それを許してはくれなかった。

母が存命であった頃こそ、普通に成長していた肉体は、母の死後——正確に言えば、そのことで父がそばを離れた後、その速度を驚くほど鈍重なものに変えた。

セスランが祖母のもとを訪れ、その後浮城の門をたたくのにかかった時間はおおよそにして一年弱――その間、彼は伸びた爪を切る必要性を覚えなかったのだ。

妖貴たる父の資質を色濃く継いだせいか、彼の肉体的変化は人間にはあり得ないほどにゆるやかなものだった。これまでそうと自覚せずにすんだのは、なんだかんだで母だけには甘かった父が、なにがしかの術をかけ続けてくれたせいなのだろう。

一年近く、爪を切る必要がないほどに肉体に変化がない。

おまけに、彼の肉体と心臓は妖鬼たちにとってはとんでもなく魅力的なものらしく、殺して血肉を啜ろうという輩が後から後から湧いてくる始末だ。

いつまでも年を取らない、魔性を引き寄せるだけの不気味な子供など、人間社会にあって生きていける者ではない。

異端視され、何か起これば真っ先に攻撃される。

母は死に、父は消えた――自分に何かがあっても、心を止めてくれる者は誰もいない。ならば、不慮の事態で犬死にする可能性が低い環境を選ぶしかないではないか。

祖母のもとでは精神的安寧はどうにも望めない。

浮城に行ったところで、それは似たようなものかもしれないとは思ったが、それでも、まだ

ましかもしれないと思えた。
異端視された挙句、生け贄のように殺されるより。
利用し尽くされて、最期に火刑台に送り込まれるより。
どんな修羅場が待っていようと、浮城であれば、その役に立つ限りは、この命と意志は保障される。
ならば、自分を取り巻く環境下で、他に選べる道はない！
母は死に、父は消えた。
異端の身で生き残るためだけに、浮城を選んだセスランは今、困惑を覚えていた。
母の死後、一度として彼の前に現れたことのない父が今、目前にある。
なぜですとか、どうして今とか、言いたいことも問いたいことも山ほどある。
だが、突然現れた父は、息子である自分の、そうした思いをかけらも受け取るつもりなど皆無な空気を纏って——それでいながら。
セスランの命を今にも摘み取ろうとしていた妖貴の前に立ったのだ。
わけがわからない。
意味不明もすぎる。

まさか、今さら自分に恩を着せるつもりでもあるまいが。
そう、思いつつも、彼の黒髪が視界を覆った瞬間の衝撃――感動と言い換えてもいいかもしれない――を、セスランは思い返す。
最初は、あまりにも思いがけない光景にただ声をなくした。
次に「まさか」と期待し、そんなはずはないと否定した。
否定して、否定して、否定して――決してそんなはずはないのだと、そんなことはあり得ないのだと、これまでの経験から積み上げた結論を選ぼうとした瞬間――。
セスランは我が身にも奇跡が起こることを知った。
記憶にある限り、母を介してしか声すらかけてくれなかった父が、初めて――直接かけてくれた、言葉。
「無様な姿を晒すでない」
この父とあの母の間に生まれた子供として――。
「……勝手、なことをおっしゃってる自覚はおありですか？」
ひたと父そのひとに視線を定め、切実なる問いをぶつけたセスランに、漆黒の魔性は言葉は返さず、ただ「それがなんだ」とばかりに笑った。

3

無様な姿を晒すな。

かなり無体なことを再会して間もなく言い切られたセスランの心境は、かなり穏やかならざるものだった。

無茶を言わないでください！

本当なら、声を大にしてそう叫びたいところだったが、現れた父はあまりに悠然としており、こちらの非難など一笑に付されて終わりだと確信できてしまうから控えたに過ぎない。

いったい何を考えて、このタイミングでこの場に現れたというのか――心底不思議に思ったのは、少なくとも彼は父親の為人をそれなり以上に理解していたからだった。

そうでなかったのは、父ではない、もうひとりの黒髪の青年のほうだった。

「……敬意を捧げるに相応しい年月を生きていらした先達のお方とお見受けいたします。この

若者との浅からぬ縁もおありのようで……」

先ほどセスランが思わず洩らした「父上」の一言を聞き逃したとは思えないから、これは牽制のつもりなのか。

それとも――。

「もしや、縁あるこの若者の助命をお望みなのでしょうか？　無論、わたしとしましても、無意味に同胞の命を散らしたいわけではない……たとえ、半端者であっても。しかもその父親が、我が先達というのであれば、なるべく穏便に済ませたいところです」

口上だけは丁寧な、流麗な美辞麗句の奥底に、青年の父に対する侮りが見えた。

父の命の残数を読み取ったのか、あるいは人間と情を交わした情けない存在と見なしたのか――慇懃無礼の一語に尽きる。

そうと気づいた瞬間、セスランの胸に強烈な怒りが生まれた。

父を侮られることが、これほどに頭にくるとは、彼はこれまで想像したこともなかった――平気で「母の封魔具の威力を見誤るあたり、けっこうなお間抜けさんですよねえ」などと、マンスラムに告げたことさえあったのだ。

だが、それはあくまで自分が父の身内であるから、その気安さゆえに出てきた台詞だ。

要するに、身内の特権というやつだ。

身内である自分が父を貶すのは構わないが、関係のない第三者にそうされるのは我慢ならない――そのあたりのことは、言わずともマンスラムなどは汲み取ってくれたもので、「それはシャイレンさまの英断が勝ったということでしょう」と答えてくれたものだ。

もっとも、そうした人心の機微に通じているとは言い難いチェリクなどは、「間抜けだったおかげであなたが生まれたんだから感謝すべきじゃない？」と身も蓋もないことを返してくれたわけだが。

しかし、彼女の言葉には、父に対する侮りや蔑みの響きはなく、単に彼の言葉を額面通りに受け取っただけだとわかったので怒りは覚えなかったのだが。

思えば、セスランは話しても大丈夫だと思う相手にしか、父のあれこれを打ち明けたことはなかった――もしかしたら、こうなることをどこかで知っていたのかもしれない。

呆れたひとたちだったと心底思う一方で、彼はやはり両親のことを大事に思っていたのだ――捻りの入った性格が、それを素直に認めることを許さなかったとはいえ。

だから、父や母を軽んじるかもしれぬ反応を示す相手には、決して彼らのことを話題に乗せはしなかった。自分の人を見る目は、確かだったと今にして思う。

これまで——これほどに父を軽視する発言を口にした相手はいなかったのだから！

ぎり、と唇を噛みしめる——体内に封じられた魔性たちの反抗など、今のセスランにとっては二の次だ。

父を軽視するこの若い妖貴を、このまま放置しておくわけにはいかない。

決意とともに気迫は増し、結果的にそれが体内の魔性たちを怯えさせた結果、苦痛が減じたわけだが、そんなことはやはり、今の彼には問題ではなかったのだ。

よくも——。

何も知らぬ身で、父を軽んじてくれた——能力のほとんどを費やすことで、この父を捕らえた母をも侮辱してくれた。

到底許せるものではない。

妖貴と対峙するなど、セスランにとっても初めての経験だ。内部に封じた妖鬼たちの抗いに手を焼いていたのも事実——だからこそ、怯んでしまった。

父と同じ存在を前に、父と同じだという思いに気を挫かれていた。

だが——。

決意はゆっくりと闘志へと変化する。

この妖貴は許せない――何があろうと、この青年だけはこの先の世界へは行かせない。行かせるものか――！

セスランがそう心を決めた時のことだ――侮辱されたはずの父が、涼しげな顔で青年に応じる声を上げた。

「丁寧な口上痛み入る。だが、貴公はひとつ勘違いしているようだ」

セスランでさえもが気づいた青年の侮りに、父が……長い長い時を生き抜いてきた妖貴たる彼が気づかないはずがない。

なのに、彼は怒りの欠片、不快げな気配ひとつ感じさせることのない態度で続けたのだ。

「我は別に、不出来で迂闊な息子の助命を求めるためにこの場を訪れたのではない」

無様につづき、「不出来」に「迂闊」ときた。

セスランが少しだけ妖貴の青年に対して抱いた怒りを減じたとしても、それは無理からぬことであったろう――らしくないと自覚している父への軽視に怒りを覚える息子に対して、それはあまりにも……あまりにもというものではないのか。

だが、おかげで冷静さを取り戻せたのは確かだ。

今はセスランの気迫に圧され、動きを鈍らせた内部の魔性たちの命は、しかしこのまま妖貴

に向かっていった時、どう暴れ出すかわからないのだ。
無闇やたらと挑んだところで、妖貴たる青年を相手に楽な戦いとなるはずもない。
苦戦に持ち込まれたまさにその瞬間に、内部の妖鬼たちが一気に暴れ出せば、それだけで形勢は一気に決してしまう。
逸るな。
焦るな。
父であるひとは、そう言いたいのだ——と、セスランは無理矢理自分にそう言い聞かせた……限りなく高い確率で、ただ単に思っていることを口にしただけだという可能性もあることはもちろんわかっていたけれど。
改めて、思う。
言葉の選び方は大事だと。
それで損ばかりしていた少女の顔が脳裏に浮かぶ——黒髪に、琥珀と深紅の色違いの瞳を持つ彼女は、足らぬ言葉でいつも誤解され不自由な思いを余儀なくされていた。
その母親である女性は、率直すぎる言動で、やはり誤解と反感を大量生産していた。
母親の親友にして後に少女の養母となった女性だけは、適切な言動を行使する能力に恵まれ

ていたが、逆に達者すぎることで、警戒心を呼び寄せることもあった。
足らぬ場合も過ぎたる場合も、言葉はあらぬ憶測を呼ぶ。
偽りを交えられる可能性を持つがゆえに――それを即時見抜く術を人間は持たぬがゆえに、時に容易くそれに踊らされる。
父のあまりに惨い言葉に今、セスランが動揺を抑えきれずにいるように。
だが、セスランはそれだけではないことも経験上識っていた。
たとえ、どんな言葉遊びを繰り広げようと、その奥に流れる道筋が存在することもあるのだということを。
父を前にして、期待したいという思いがないとは言い切れない。
だが、あれほどあからさまな軽侮を向けられても、顔色ひとつ変えない父のありさまに、セスランは考えずにいられない。
父が、この場に現れたその理由に。
自分の命を摘み取る気満々の妖貴の前に、現れた父――。
彼が明言した以上、自分の助命が理由ではなかろう。そもそもそんな事態は、セスランの認識上あり得ない。「自分の好きに勝手に生きて死ね」――それが両親ともの自分に対する選択

なのだと確信している。

だから、父が今、窮地に陥っている自分の前に姿を現す理由はない。

理由があるとすれば――。

「助命が理由でないというのであれば、いったいどんな御用向きでしょう？　ご子息は女皇の絶対のご命令に反する行動をとっておいでだ。あなたにもそれはおわかりのはず……助命以外の目的でこの場に現れたとおっしゃるのなら……長命なるお方、あなたの真意はいずこに？」

長命なだけで力もろくにないお前に何ができる――若き妖貴の声なき声が、耳でなく魂に響き渡る。

最早父への侮蔑を隠そうともしない若き上級魔性を前に、客観的事実のみを拾えば、侮られても仕方のない状況に置かれた父は、ふわりと笑った。

捕縛師たる母にその命のほとんどを奪われ、残命一となった父は、普通に考えるなら同じ妖貴の敵ではない。

複数の命を持つ魔性たちは、保有する命の数ゆえに、戦闘における命の損失を惜しまないとまではいかないが、ある意味仕方がないと見なしているところがある。

ただひとつの命を賭けるしかない人間とはそこが大きく違う。

だが……そのせいか、彼らは命の残数が限りなく少ない相手を軽視する傾向を持っている――無限に近い力を使い、費やした結果、命数の大半を失った魔性の大半が、残された命を惜しむことが多いためだ。

また、そのための誤解もある。

命数が少ない者は、その力も小さい、と――。

だが、それは大きな間違いだ。

そのことを、セスランは知っている。なぜなら、その実例を一つどころでなく知っているからである！

片手の指に余るほどの力しか残っていないにもかかわらず、今でも世界の王たる力をかけらも失っていない五要が一――柘榴の妖主と。

人間と生まれたと信じ、脆弱な肉体と命しか持ち合わせぬと信じながら、それでも堂々と魔性の王と対峙し続けた妹とも娘とも思う存在と。

命数など当てにできぬ。

大切なのは、想う心の強さであり、決意の重さであり、実行すると思い定めることである。

けれど、それは……例外中の例外たる存在だけが、持ちうる決意であり力なのだと、セスラ

ンはどこかで想っていた。

まさか。

どくん、と心臓が大きく脈打つ。

穿ちすぎかもしれない。

自分は単に、あらゆる可能性をこの状況で走査し、その中で今の自分に最も優しい可能性を見いだし、それにすがっているのかもしれない。

思いもかけない父の出現によって、通常の判断ができずにいるのかもしれない。

否定材料は山ほど浮かぶ。

そんなはずはない、第一、父がここに現れる正当な理由はない——あり得ない。

彼の真名が、それを阻む。

ただひとりの主を選ぶこと——そのことさえも、事前に禁じられた名を命に冠された、そのことが。

「年若き者よ」

憐れみを込めた声で、父は相手に呼びかけた。

「幼きがゆえに、汲み取る術を持たぬ者よ」

侮られたことも、貶められたことも、何とも想ってはいない響きで、年長者たる妖貴が語る――まるで、子供に言い聞かせるがごとく。

「重ねて言うが、我は、わが息子の助命に参じたわけではない」

そのような必要はないのだから。

言外の意は、果たして若き妖貴に伝わっただろうか。

この明確なる意志、明確な決意――それを以て、こちらの意志など関係なしに行使するその力。

セスランは、父から放たれる力に打たれ、これまでどうしてもできなかったことが容易くできるようになったことを感じた。

これまで、制御できなかった妖鬼たちの命を支配する術が、水が流れるがごとき自然さで脳裏にしみこんでくる。

いや、そればかりか――。

いま対峙している妖貴の命すらも水のように啜り取り、体内に取り込める術が――流れ込んでくる。

「父上！」

セスランは慌てた。

これは何だ、何なのだ!? どうしてこんな力が、術が自分の奥深くから湧き上がってくるというのか!? まるで、本来在った能力が、ずっと封じられていたかのようではないか！

「父上、これは……!?」

どういうことなのです――!?

問いかける言葉は最後まで続かない――ちらりとこちらに一瞥を寄越した父のその眼差しが、どんな言葉より雄弁に答えを語っていたからだ。

いつの間に――いや、それは最早意味を持たぬ疑問だ――ひとつの確信が、セスランの胸に落ちる。

生まれ落ちてすぐか、あるいはその異能に気づいた時点でか、この父はセスランの能力の一部――あるいは大部分――を封じていたのだ！

「父上！」

ふつふつと湧き上がる新たな怒りは、完全に父に対するものだった。

これまでの苦労が走馬燈のようにセスランの脳裏に甦る。容易く封じられてくれる妖鬼ばかりではなかった――封じるのも命がけなら、封じた後も相当苦労させられたことも多い。

自分の力がもっと強ければ、もう少しは順調に仕事を進められたのに――チェリクによるスパルタとしか言いようのない指導を受けてなお、セスランの苦労はあまり減らなかった。彼女は彼の力を増すのではなく、有限の力を効率よく使いこなすための指導に重きをおいていたのだから当然ではあったのだが。

しかし、それは……それらの苦労は、全部父のせいだったのだ！

封じた挙句に「好きにしろ」とは、先ほどまで信じて疑わなかった父からの愛情に疑問を覚えても無理からぬ真相ではないか。

「いったい、どういうおつもりで……」

こんなことをなさったんです!?

若き妖貴を蚊帳の外に、セスランは父に食ってかかった――無視された妖貴が激怒しようが今はどうでもよかったのだ。

しかし、息子の怒りなどどこ吹く風とばかりに、父たるひとは泰然としていた。

「仕方なかろう。我が君らの意向に背くやもしれぬ力を、野放しにするわけにはいかぬ。だが、そなたは我とシャイレンの息子だ、殺すわけにもいくまい。命をかけてそなたを産み落としたシャイレンを思えば、それはできかねた。ならば、我が君らの邪魔にならぬ程度に力を抑える

しかないではないか」

淡々と告げられる内容は、勝手すぎる理屈に満ちていた。

今度こそ、自分に向けられる愛情に根源からの疑問を抱いてしまったセスランは、憎まれ口でも叩かないことにはやってられない気分に陥った。

「主を持たぬ身が、何をおっしゃいます！」

禁断の言葉を口にしてしまうぐらいには、セスランの怒りは大きかった。

父は唯一無二の主――妖主を持たない。

正確に言えば、持つことができないのだ。

なぜなら、彼の真名にはふたつの妖主に連なる、深すぎる縁が刻まれているからだ。

魔性が生まれながらに持つ真名には、仕えるべき主を限定するものが含まれていることがある――色彩に通じるものが最も多く、次に属性に通じるものが多い。

例えば翡翠の妖主の配下の妖貴には、植物に通じる真名を持つ者が多い。

白焔の妖主の配下には、炎か白に通じる真名を持つ者が。

紫紺の妖主のそれには糸に通じる真名のものが。

名は真実を表すもの――それゆえに、そうした真名を持って生まれた魔性は繋がる妖主を主

に選ぶ……件の妖主が受け入れれば、そのまま配下として認められる。
だが、時に複数の妖主に通じる真名を持って生まれる者もいる。
セスランの父がそうだった。
しかも、惹かれる強さ……絆は同等の真名を持って生まれてきた。
二人の妖主を同じ強さで慕わずにはいられない——これでは、どちらかを選ぶことなど不可能だ。
だから、父はどちらをも選ばなかった。
その道しか彼には許されなかったのだ。
そのことを、セスランは父から打ち明けられた真名から知った——母がまだ健在の折、気まぐれのように投げかけられたその真実は、彼にとってかけがえのない秘密であり、宝物でもあったのだ。
その父が、今さら「我が君」などと言う。
選べぬ運命に生まれ落ちたひとが、何を言うのかと思った。
はっきり言えば、セスランはこの時、本人の自覚以上に混乱していたのだ。
父であるそのひとが、「我が君」ではなく「我が君ら」と口にしていることをうっかり聞き

流してしまうほどに。

「わかっておらぬようだな、我が子よ」

そんなセスランに、憐れみにも似た眼差しを向け、父たるひと――「四蜜」たる真名を冠する妖貴は告げた。

「そなたの力を柘榴の君は興じられたが、王蜜の君は慎重に扱うべきと判断なされた。ご令嬢が誕生なされた後も、おふたりのご意志が一つに重なることはなかった。これでは我は動けようはずがない。無理もない……この世における最強のおふたりは、世界の均衡を保つべく常に相反するか、そうでなくとも完全に重なることなどなき意志決定を下されてきたのだ。おふたりのどちらかを選ぶなど、この身にかなうことではない。だが……」

最強の魔王ふたりに、強い縁で結ばれた真名を持つ父は――それゆえに唯一の主を冠することの叶わぬ父は。

この刹那、セスランがこれまで見たことのない――いかなる機会であれ、いかなる存在に対してであれ、見せることのなかった顔を、見せた。

一言で言うなら「至福」――。

「我が君らの意志が、先ほどひとつにまとまった。生まれ落ちてより数千余年――まさか、こ

れほどの喜びを与えられる日が来ようとは、想像だにせなんだ僥倖」

今度ばかりは、セスランも父の言葉を聞き逃しはしなかった。

歓喜に震えるその声が、彼の耳をも支配し、聞き逃すことさえ許さなかったのだ。

「我が双君は同じ決断を下された。なれば、我がそなたの力を封じる理由はない。存分に力を揮うがいい」

それは完全なる力の解放――。

セスランが持って生まれた力が、完全に解放された瞬間だった。

生まれてたかだか数年の妖貴の命を啜り上げることなど、今の彼にとっては造作もないことだったのだ――。

第四十四章　蜘蛛（くも）の糸のごとく

1

その瞬間――。

真紅の破妖刀の上げた咆吼を、何と呼べばいいのか。

極上の命を味わえた至福の叫びか、最愛の魂を取り戻せたがゆえの歓喜か、使い手たるラエスリールの期待に応えることのできた誇らしさか――。

あるいは、それら全てを孕んだものか。

世界から隔離された黄金の闇が支配する原初の海辺に、破妖刀の放つ真紅の輝きが満ちる――未だ消滅しきれぬ金闇と混ざり合い、朱金の光闇がその空を染める。

それは夕焼けか朝焼けか――。

どちらでもいいとラエスリールは思った。

朝焼けは一日の始まりを告げる眩しさに溢れているが、夕焼けもまた命に優しい一面を持っ

ている。
茜に染めて陽が西に沈んだ後、世界を覆う夜の闇は、一日を懸命に生きた命たちを優しく包み眠りを与える。
太陽の下で一所懸命に生きた者たちに、夜の闇は安らぎを与える。
闇に紛れる脅威が在るのは事実だが、夜が持つ力はそれだけでは決してない。
灼熱の陽光にさらされ疲れた肉体を、冷やし慰めてくれるのは夜の闇なのだ。
昼にも夜にも、それぞれひとつではない側面がある。そうである以上、朝焼けと夕焼けにも同じことが言えるのだ。
凍える夜の終わりを告げる朝焼けと――。
灼熱の時の終わりを告げる夕焼けと――。
それが生きる者へ与える意味には大差ないと思うから、どちらでもいい、と思った。
世界がそう単純でないことなど、ラエスリールは知っている。
太陽が支配する時間も、闇が支配するそれも――ともに脅威を孕んでいる。
どちらが世界に、生きる者に優しいかなど、到底一括りにはできない。
だが――。

優しい昼間も、残酷な夜も、過酷な昼間も、優しい夜も。
区別することなどできないほどに解け合って、世界を満たしているのだと思う。それは混沌という言葉が相応しいのかもしれない。
それでも、だからこそ、全ての事象はただひとつの意味合いではなく、異なるもうひとつのそれを持ち得るのではないのか。
ならば、この世界の空を染める茜がどちらであろうと、構わないではないか。
そう感じた瞬間、ラエスリールの脳裏に何かが過ぎった。
彼女の思惟に連なり、浮かび上がってきた何か——とても重要な何かが。
父たる王蛮の妖主と対峙するにあたり、全身全霊の力を振り絞った極限の状況であったからこそ感知し得たのかもしれぬ、その何かを——。
摑もうとして、しかしラエスリールはそれを果たすことができなかった。
父の左胸——まさに人間と同じ位置にある心臓を紅蓮姫の刀身が貫いたことによって、彼が確保していたアーゼンターラの命がふわり、とその身から放たれたからである。
女皇によって、奪われてしまった銀の髪と菫色の瞳を持つ少女の命——。
父である王蛮の妖主の強大なる魅了眼の力によって、女皇が必要とする「世界を破壊する

ための鍵」から分離された、他には意味を持たぬ、アーゼンターラ自身の命。
ラエスリールが求め続けてきた、ただひとつの輝き。
それが、唐突に自由を得たことで、閉ざされたこの世界に解き放たれようとしていた。
「駄目だ！」
父の懐深くから、ふわふわと頼りなげに彷徨い出た淡く紫銀に輝く光に、ラエスリールは慌てて手を伸ばした。
「ここでは、駄目だ、アーゼンターラ！　ここにお前が戻るべき体はないし、お前を待つ者もいない！　お前が戻るべきはここではない！」
だから、飛んでいくな！
この世界の隅々までを捜しても、お前の求める者はいない——だから！
必死に、ラエスリールは紅蓮姫を握っていない左手を伸ばした。
アーゼンターラの命は、しかし自らに何が起こっているのかわかっていない様子で、誰かを何かを捜しているようにその身を震わせる。
ここにはない、ここにはいない誰かを。
それは、誰だ？

ここで彼女の命を見失ってしまえば、恐らく二度と見いだすことは叶わないに違いない――確信を持って、どうあってもここで戻ってもらわなくては、とラエスリールは断じた。

誰だ。

アーゼンターラが命のみとなっても、求めているのは誰なのか。

紅蓮姫でないのは、この状況下に置いては――彼女にとっては気の毒だが――明らかだ。

では、アーゼンターラが今一番案じているのは誰なのか？

ラエスリールは必死に記憶を辿った。

魔具である黄玉に封じられている間、ずっとアーゼンターラとその護り手である蜜里とともにあった。

だから、わかった――。

アーゼンターラが紅蓮姫に今この時点で心を配らない理由までも。

紅蓮姫は強い。アーゼンターラは……前世の記憶が戻りきらぬ彼女は、そう信じて疑わないのだ。

最強の破妖刀――紅蓮姫。

それは、彼女の前世であるラキスと紅蓮姫が生涯をかけて積み上げ、築き上げた絆があって

こそのものだというのに、アーゼンターラはそのことを忘れている。
いや、それは当然というものか。
人間は、輪廻の門をくぐることにより、「生きること」をやり直せる。
その代わり、前世の記憶は洗い流される。
大きすぎる悔恨、忘れることのできぬ心身の痛手――忘れることで、水に流して、人は新たな生を迎える。
やり直すために――あるいは忘却を経てもなお癒されぬ傷をじっくりと治すために。
この世に生まれ落ちた瞬間からの全てのことを記憶に刻んだままでは、きっと人間は生きていけないのだ。人間は魔性とは違い、忘れることによって、生まれ変わることができるのかもしれない。
その忘却を救いと取るか喪失と取るかはひとによって違うのだろう――アーゼンターラがどう受け取っているのか、それもラエスリールにはわからない。
だが、忘却を受け入れた彼女にとっての生は、アーゼンターラとして生まれ落ちた瞬間から始まったものを指しているに違いない。
喪った村、一度は喪ったと信じた弟――記憶を歪めてもなお、そばにいてくれた幼い妖貴の

少女、共に戦った浮城の仲間たち。
彼女にとって、在るべき場所とは、彼らがいる処だ。
そこへ、彼女は帰ろうとしている。
だが、この閉ざされた世界に、彼女が求める者は誰ひとりとしていない——ここを彷徨う限り、彼女は彼らのもとへは戻れない。
駄目だ——このままでは、アーゼンターラの命は永遠に迷い続ける。
帰さなければ。
そう、自分はあの妖貴の少女と約束したのだから！
「四闇……いや」
命じかけたところで、ラエスリールは気づいた。
彼女に従う闇の数が増えている——先ほどまで、敵意を露にするばかりだった金闇の一部が、静かに彼女に寄り添っている。
父たるひとにのみ従っていた黄金の闇——この世界を構成する五闇のなかで、最も強い影響力を誇る力……そうと気づいて、彼女は再び口を開いた。
「金闇よ、この閉ざされた世界を開け！　四闇はお前たちの同種の気配を辿り、そこへの道を

拓け！」

右目が熱を帯びる——目映いばかりの金に輝くのを感じながら、ラエスリールは四闇たちが拓くその先に意識を集中した。

アーゼンターラの命を、無事に彼女を待つ者たちのもとへ導くために……否、真なる導き手を見いだすために！

原初の闇が渦巻くこの世界から、彼女を間違いなく呼び寄せる想いと力を備えた呼び声を放つ者を。

「蜜里！」

拓かれる道の先に向かって、ラエスリールは叫んだ。

「蜜里！　聞こえるか、アーゼンターラの命は解放した！　呼んでくれ！　彼女が迷わずお前たちのもとへ帰り着けるよう、強く強く彼女を呼べ！」

闇が蠢くばかりに視える道の先に、針の穴ほどの光が出現したのはその時だった。

今にもかき消えそうな、か細い声がそこから洩れる。

「……スリ……ル？」

自分でも信じられないと言いたげな、不安を宿すその声は、間違いなく幼い妖貴のものだっ

た。

「蜜里！」

届いた――！

ラエスリールはより強い声で彼女に告げた。

「アーゼンタ－ラはここにいる！　呼んでくれ、蜜里！　そうすれば、アーゼンタ－ラはお前のもとに戻る！」

それは確信――かけらの不安も覚えなかった。

なぜなら、蜜里と自分が口にした瞬間、そして幼い少女の声が聞こえてきた途端（とたん）、当てもなく彷徨いかけていた小さな命の輝きが、ぴたりとその動きを止めたからだ。

「呼べ！」

ラエスリールの叫びと、蜜里のそれはほとんど同時に世界を震わせた。

「タ－ラ！」

紫銀の光が反応する。

「タ－ラ！　こちらよ、ここにわたしは……わたしたちはいる！　トーンもスラヴィもマイダードもオルグァンもっ！　みんな、ここにいるわ！　ここであなたを待ってる！　だから……

ターラっっ！」

帰ってきて！

幼い少女の全身全霊をこめた願いに、アーゼンターラは即座に応えた。

四闇の拓いた道目がけて、紫銀の光は飛び込んだ――迷いも不安も、何も感じさせぬその動きに、彼らの絆の強さを見出し、ラエスリールは知らず微笑んだ。

そうだ、行け――戻れ。

胸中でそう励ましながら、彼女はアーゼンターラを見送った――。

2

蜜里は浮城の最奥に位置する氷室にいた。

それは自然の氷室ではない——浮城の警護を任された護り手たちによって作り上げられた場所である。

かつて、この氷室に安置されていたのは、王蜜の妖主と浮城史上最強を謳われた魅縛師との間に生まれ落ち、数奇な運命を歩み続けてきた女性の肉体だった。

仮初めの死の眠りに落とされた黒髪の破妖剣士——魔性の身でありながら、最強の破妖刀紅蓮姫の鞘たることを可能とした奇跡にも等しい存在。

強大な魅了眼だけが、その理由ではないことを、蜜里はすでに確信している。

その心身に刻まれた無数の傷が、繰り返し襲いかかった過酷な運命が、残酷な巡り合わせが、そんな中でも心を折らなかった強さが、彼女という存在を作り上げた。

彼女が独力で為したことではない。

彼女を案じ、彼女を守り、彼女を気遣う存在が周囲にあったからこそ、彼女はそれら全てを乗り越えることができたのだ。

だが、そうやって傷さえも輝きに変える存在と化した彼女は、最早喩える相手さえいない、唯一無二のものとなった。

蜜里は今でも、克明に思い出すことができる。

璃岩城――紫紺の妖主を倒した直後、出現した女皇によって、一瞬でアーゼンターラの命が奪われたその後。

あまりの衝撃に、現実を現実として受け入れることができず、ただ呆然とし、次いで愛する少女の名を繰り返すしかできなかった――心が凍りついたままに流れたあの時間。

目の前に現れたのは、全魔性の頂点に君臨する女皇――彼女の意向に逆らうことなど、蜜里には想像することさえできず、けれどアーゼンターラの喪失もまた、同じほどに認められないことだった。

アーゼンターラを殺した女皇――自分にとって最愛の友の命を奪ったそのひとは、けれど自身の根源に刻み込まれた絶対無二の主だった。

無二の友を無二の主が殺した。

そうして、その命を自らの道具として利用しようとしている。

それは蜜里にとって耐え難いことだった。

百歩譲って、戦った後に奪われた命なら、諦めがついたかもしれない。そうであれば、アーゼンターラの命が尽きる前に、自分のほうが先に死んでいるから——いつからか、きっとそうすると決めていたから、きっと構わなかった。

けれど、あの時。

自分は一歩たりとも動くことができなかった。

女皇が出現した瞬間、全身がその圧倒的な力——女皇が保持する力ではなく、存在することそのものが放つ力を前に、指一本動かすことができなかった。

ただただ圧倒された。

その一瞬に、女皇は自ら欲するものを手に入れたのだ……彼女が求める「破壊の鍵」を宿すアーゼンターラの命を。

そうと自覚してもなお、蜜里は女皇を憎むことさえできなかった。

女皇は、絶対の存在だと、何の理屈もなくわかってしまったからだ——自分を含む魔性全て

の頂点に君臨する者、唯一絶対の……。

けれど、アーゼンターラもまた蜜里にとっては唯一無二の存在なのだ。

唯一無二の友を殺したのは、やはり唯一無二の主で、自分は女皇を憎むことも牙を剝くこともできない……けれど。

ターラを失うことにも、またこの心は耐えられない。

彼女を奪う存在は、誰であろうと許さない——かつて心に誓ったことが、実現できぬ現実にぶつかり、蜜里の心は引き裂かれそうになった。

そう……あのままの状態がもう少しでも続いていたら、自分の心は粉々に砕け散っていただろうと思う。

無条件に従うべきだと魂に刻まれたひとが、最愛の友を——彼女を害する存在は誰であろうと許さないと、心に決めた少女の命を奪った。

許せない——背けない。

背けない——けれど、絶対に許せない。

あの二律背反の感情の嵐の中で、蜜里が無理にでも答えを出そうとすれば、それは自壊しかなかっただろう。

事実、半ばそうなりかけた。

けれど――。

半ば以上壊れかけていた蜜里を、現実に引き留めてくれたあの女性――。

諦めるな、と告げた声。

それは、女皇が纏う絶対的な何かではなかった。

圧倒し、支配するのではなく、嘆きの激流に呑まれそうになっていた蜜里に差し出された、岸辺から伸ばされた手に過ぎなかった。

その手を摑めば、この身は助かるかもしれない――だが、もしかしたら彼女自身を巻き込んでこの激流でともに溺れるだけかもしれない。

女皇の放つ絶対的な輝きに比すれば、あの時のラエスリールのそれは、その程度の……夜の闇を、ほんの一部切り取るほどの光を放つものでしかなかった。

女皇の力を灼熱の太陽に喩えるなら、ラエスリールのそれは三日月にも満たないか細い月光……否、もっと弱々しかったかもしれない。

満月の夜空では、月光にかき消され、自らの存在を主張できないほどに小さな輝きを放つ星程度のものかもしれない。

だから――。

あの時、あの場に現れたラエスリールの輝きに、人間ならいざしらず、蜜里が圧倒されたということはなかった。

ただ、彼女の告げた言葉が、彼女が全身に纏う気が――。

女皇の存在に圧倒された蜜里の心に、じわりとけれど確実に染み込んできたのだ。

彼女が口にした「約束」の一言は、女皇が放つ絶対の支配の隙間を縫って、この心を染め上げたのだ。

信じるということ――信じて待つということ。

蜜里には馴染みのない感覚であり、行為だ。

自分以外の誰かの成果を、ただ待つだけなど、妖貴たる蜜里には耐え難い苦行だ。

それでも、蜜里はそれを受け入れた。

女皇に抗う術を持たぬ、それでいてアーゼンターラの死を受け入れられない自分にできることは、ラエスリールを信じ、アーゼンターラの命運が尽きぬことを信じ、ただ彼女の目覚めを待つことだけだと悟ったからだ。

信じる――祈る。

以前は馬鹿にした行為だった。

自分に為すべき力がないから、他者の力を頼りにする——神への信仰、神への祈り。

そんなものは無力な者が、他にできることがないから選び、縋る行為でしかないと。

人間という、塵芥に等しい者たちだけが、自身の心の安寧を求めるために、選んだ行為であり、決して実ることはない行為なのだと。

ずっと、ずっと、思っていた。

アーゼンターラのことは大好きで、彼女のことは何でも理解したいと思っていたけれど、彼女が朝晩欠かさず亡くなった先祖やこの世界の創造神ガンダルへの祈りを捧げる行為だけは、どうしても理解できなかった。

あてにならない力を頼ってどうするのか、という純粋な疑問はもちろんだが、すぐそばにもっと頼りになる自分がいるのに、どうしてそんな応えてくれる保証もない存在に、欠かさぬ礼を尽くすのかという苛立ちもあった。

自分なら、アーゼンターラが言ってくれさえすれば、望みなんて全部叶えてあげるのに。

自分に言ってくれれば、他人を頼る必要なんてないはずなのに。

けれど、その時、アーゼンターラは告げた。

『父さんや母さんやトーンや……知ってる大事なひとが今にも死にそうな目にあったら、わたしは迷わず蜜里に頼むわ。でも、毎日お祈りしてるのは、そんなことにならないように、みんなが元気でいられますようにってことなの』

言われた意味が、蜜里にはわからなかった。

『それって、早い話が気休め？』

その時の、アーゼンターラの表情が忘れられない。

ずっとそばにいて、彼女のことは全部理解していると思っていたのに、その時見せた彼女の表情の意味だけは、蜜里には読み解けなかったのだ。

『そういう見方もあるかもしれないけど……まあ、それは宿題ということで』

なぜ、どうしてと詰め寄る蜜里に、アーゼンターラは最後までその言葉を通した。

それは多分、当時の蜜里には人間の「祈る」「願う」根源が理解できない上に、アーゼンターラにもまたそれを適切に説明できる力がなかったからだろう。

事実、蜜里はそれらの感情を理解することができなかった。

自分にとって不快な現実は、改変してしまえばいい。

祈ることも願うことも、何もできない弱者の気休めに過ぎない。

そう——思っていた。

あの日、あの夜、紅蓮の炎がアーゼンターラの大切な全てを舐め尽くすまで。

その時、自分が何より大事な少女のそばにいられない罠にはまってしまうまで。

そうして、何より大事な少女は、自ら抱える罪悪感ゆえに、記憶を塗り替え、別人としての生を選んだ。

救えなかったと信じた、自らの弟として生きることで……彼女は自身を葬ったのだ。

まさに魂を半分切り捨てる少女の選択に、蜜里は口を挟むことを許されなかった。

そうして変わってしまった少女は、自らを少年だと信じ、蜜里を信用ならぬ相手と見なすようになった。

あの時、蜜里の世界は変わった。

目の前にいるのは確かに自分が唯一無二と思った存在——アーゼンターラだというのに、彼女にはその自覚がないのだ……大きすぎる自責の念によって。

以来、数年——。

妖貴たる蜜里にとって、瞬きにも等しいはずの時間が、無限の地獄に思われた。

そばにいるのは間違いなく、蜜里が大好きな、蜜里にとって唯一無二のアーゼンターラに違

いないのに、彼女自身がその事実を受け入れずに拒絶する。
だから、蜜里を近づけない。
そうして、自分自身を痛めつける。
村を救えなかったこと、家族を、村人を救えなかったこと。
全部、全部を自分のせいだと決めつけて、その心を痛めつけ続けるのだ。
止めて、止めて、と。
何度叫んだことだろう——お願いだから、もう止めてと。
縋って頼んでも、自身の記憶を改変したアーゼンターラに、蜜里の叫びは届かなかった。
なんで、こんなに頑固なの？
なんで、こんなに聞き分けがないの？
なんで……どうして、こんなに思うとおりにいかないの？
そう……蜜里は。
祈ることも願うことも不要である——全ては自身の思い通りになるのだから、と思っていた幼き妖貴は。
その時点で初めて、思うがままにならない現実というものに直面したのである。

戻って、戻って——思い出して！

声に出せぬ叫びを放ち続けることで、蜜里はようやく知ったのだ——以前はわからなかった祈るという行為のその意味を。

世界は思うがままに動くものだなどと——自分は何と無知であったことか。

大切なたったひとりの心さえ救うこともできぬほど、この身は無力であるというのに——不甲斐ない自分に地団駄を踏みたいぐらいなのに。

けれど、心は望みを切り捨てられない——諦めてこの現実を受け入れることができない。

ターラ、ターラ、どうか思い出して——。

あの時蜜里は祈るということ、願うということを受け入れたのだ——そうせざるを得ない心の有り様というものを。

そして、今——。

蜜里の心を占めるのは、あの時に抱いた以上の想いであり願いであり祈りだ。

命を抜き取られたアーゼンターラの肉体を前に、蜜里は祈ることしかできない。

「ターラ……ターラ」

目覚めて——お願い戻って来て。

「スラヴィたちの口利きで、トーンも浮城にいられるようになったのよ。芝牙尖がいなくなったせいで、火傷の痕は残ってしまったけど、体に不自由はないみたいだから安心して。いえ、駄目だわ。安心なんかさせたら、ターラはちょっと怠け者だから、いつまでものんびり構えて戻って来ないかもしれないわ。ターラ、ターラ、今のは嘘よ。トーンはここにいるけれど、なかなか周囲に溶け込めずにいるわ。早く戻ってきて、彼に浮城での暮らし方を教えてあげないと、彼のことだから我慢できなくなって飛び出してしまうかもしれないわ」

やっと取り戻した弟に家出されたくなかったら、早く戻ってきてちょうだい！

返る言葉はない。

それでも蜜里は、今は空っぽのアーゼンターラに話しかけずにいられない。

死んでいない——アーゼンターラの命は尽きていない。自分自身にそう言い聞かせるためにも、その行為は必要だった。

だから——。

空気ではなく、意識を震わす声が脳裏に響いた時、蜜里はすぐにその現実を認識できなかった——記憶に残るその声が、自分に呼びかけてくるその時を焦がれるあまり、これまで何度も幻聴を繰り返していたからだ。

――蜜里！

ああ、まただ――また、自分の心が勝手にあの声を思い出して……。

そう思った時のことだ、声はさらなる言葉を紡いだ。

――蜜里、聞こえるか！　アーゼンターラの命は解放した！　呼んでくれ！

焦がれるほどに待ち望んだその言葉に、蜜里の心がざわめいた。

これも幻聴なのだろうか？　こんな、現実を知れば心が打ちのめされるとわかりきっている残酷な言葉を、本当に自分の心は作り出したのだろうか？

それとも……。

緊張に、全身が震えた。

これが幻聴なら、自分は恐らく耐えられない――確かめるのが、怖い。

けれど。

これが、現実なら――。

魔性たる身に似つかわしくない、痺れる舌先を必死に宥めながら、蜜里はその声の主の名を呼んだ。

「……ラエスリール……？」

望む未来を引き寄せるために――。

3

アーゼンターラの命が無事に元の世界への道に飛び込んで間もなくのこと。

ラエスリールは右手から伝わってくる紅蓮姫の波動に異変を感じた。

彼女が紅蓮姫に求めたことは、父を縛る枷に囚われた、この心臓に宿る命全てを奪い尽くすこと——そうすることでしか、父を理不尽に縛る創造主の呪縛を断ち切れないと判断したからだ。

だから、アーゼンターラの命を必死に現に戻すために声を張り上げつつも、紅蓮姫を握る右手への集中は絶やさなかった。

父の命を奪うなど、考えたくもないことだったが、それらが父を蝕む元凶に連なると知っては放ってはおけなかったのだ。

ここに宿る命、ひとつ残らず食い尽くせ！

声にならぬ叫びをこめて、紅蓮姫を振るった。

幸い、そこ――父の心臓に宿る命には、以前紅蓮姫を怯ませた翳りは存在しなかった。だから、真紅の破妖刀は素直にその言に従ってくれたのだ。

何より極上の命を食する機会を、紅蓮姫自身逃さなかった。

他のどんな破妖刀より貪欲で、最も舌の肥えた彼女は、嬉々としてラエスリールの言葉に従った。

妖主の心臓に宿る力は無数に近い。

以前ラエスリールが紅蓮姫とともに対峙した白焔の妖主も紫紺の妖主も、心臓ひとつに宿る膨大な数の命ゆえに、大食漢の破妖刀が満腹を覚えたほどに。

それは父たる王蜜の妖主にしても同じことだとラエスリールは思っていた。

父を縛る枷に繋げられた命を悉く葬る――同時にそれは、紅蓮姫を充分満足させるだけの報酬となるに違いないと。

その認識に間違いはなかったと思う。

前例のない事態に対する時、それに類する経験をもとにするしかないのだから――だが、紅蓮姫の食欲……否、命を貪る意志は、ラエスリールの想像を超えた勢いを有していた。

父たるひとの左胸に宿る命数だけが、極端に少なかったせいで、紅蓮姫の飢えを満たすに充分でなかったのか？

思いついた可能性を、ラエスリールは即座に否定する。

そんなわけがない——自分の右目が何よりその事実を知っている。

リーダイルの肉体に宿り、新たに作り上げた父の四つの心臓の輝きに優劣など見いだせなかった——そこに宿る力は、これまで対峙したいかなる妖主のそれより大きかったと断言さえできる！

それでも止まらない紅蓮姫——度重なる戦いの中で、許容できる魔性の命数が増えたと見なすこともできる。

できるが……恐らくそうではないことを、ラエスリールは直感した。

柄を握る右手から、紅蓮姫の声が流れ込んでくる。

それは、食欲を最優先する彼女しか知らないラエスリールにとっては未知の、不安と焦りに駆られた……追い詰められたもの。

まだ、充分じゃない。まだまだ、安心できない。

紅蓮姫の声は切羽詰まっている。

もっと、もっと、もっと。
そうでなければ、到底安心などできない、と。
不安と恐怖に駆られた声が、満たされた食欲を押しのけて、さらなる食命へと彼女を駆り立てていた。
飽食を通り越した行為だ。
それは彼女に喜びではなく苦痛をもたらすものであろうに、紅蓮姫の行為は止まらない。一途に必死に、心の安寧を得るために、それまで相手の命を食らいつづけようとしている。
どうして――と、ラエスリールは思わずにいられなかった。
こんな紅蓮姫を彼女は知らない。こんなに必死な紅蓮姫の姿を、彼女はこれまで目にしたことはなかったのだ。
「紅蓮姫！　もういい、もういいから！」
叫んで制止しても、真紅の破妖刀は言うことを聞こうとしない。
これが常の食欲ゆえの行動ならラエスリールとて驚かない――だが、今、紅蓮姫は自らの許容する以上の命を、意志を以て啜り取ろうとしている！
どうして――!?

かつてなかった出来事に、ラエスリールは混乱した。

こんなことは、これまで一度もなかったのに……どうして、と。

その時脳裏に甦ったのは、アーゼンターラの命が女皇によって奪われた直後の、璃岩城における紅蓮姫の悲鳴だった。

ラキス、ラキス、ラキス、ラキス！

他の言葉など忘れてしまったかのように、アーゼンターラの前世にして恋人であった青年の名を繰り返していた紅蓮姫。

あの時の衝撃が、恋人を目の前で奪われた出来事が、紅蓮姫の心に何らかの変化をもたらしてしまったのだろうか？

二度と、愛する魂を危険に晒さないために、危険と断じた存在は決して許さない——我が身が砕けることになろうとも、そんな命は食い尽くしてしまおう……とでも？

それは、ラエスリールの知らない紅蓮姫だった。

だが、あの時あの場で、悲痛としか言いようのない声を上げていた彼女を知る身には、あり得ないこととは思えなかった。

「紅蓮姫！」

止めろ！

思わず叫ぶ――黄金の右目を輝かせ、無理矢理にでもラエスリールは破妖刀の暴挙を止めるつもりだった。

父を案じてのことか、それとも紅蓮姫を思ってか。

自身でも判断できぬほど、ラエスリールは焦っていた。

「紅蓮姫！」

これまでで一番の怒りを込めた声で、破妖刀を制止する。

けれど、紅蓮姫は止まらない――ラエスリールの魅了眼の支配力を押しのけてまで、彼女は我が意を通そうとしていた。

その身が大きすぎる負荷に砕け散ろうとも、二度とアーゼンタールを危険には晒さない。

そんな決意で紅蓮姫が自壊への道をたどっているのだとしか、ラエスリールには思えなかった。

「やめてくれ、紅蓮姫！　そんなことはアーゼンタールも望んでない！　自分のためにお前が砕けたと知ったなら、アーゼンタールがどれほど悲しむか……！」

だから、止めてくれ、お願いだから！

喉が裂けんばかりに上げた声に、けれど紅蓮姫は応じてくれない。
ラエスリールの胸を、絶望が染める。
自分では駄目なのか。自分では、この真紅の破妖刀を止めることはできないのか。十数年をともにした――それだけの絆では、本気の彼女に言葉を届かせることさえできないのか、と。
「紅蓮姫……」
泣きそうな声で、破妖刀の名を呼んだ時――。
奇跡が起こった。
正確に言えば、ラエスリールにとっては奇跡としか思えない出来事が、目の前で展開されたのだ。
「止めなさい、真紅の少女よ」
淡々たる声で呼びかけながら、その切っ先に優雅な長い指が触れる。
「お前にわたしの命の全てを啜り取る力はない」
そう告げるのは――今、この時も、紅蓮姫に命を奪われている王蜜の妖主そのひとだった。
「縦しんば我が命の全てを奪ったところで、お前は誰の命も救うことはできない。お前という存在なくして、お前が大切に思う者たちが、未来を勝ち取る道はないのだから――」

優しく言い聞かせるようなその声に、紅蓮姫が何を感じ取ったのかはラエスリールにはわからない。

ただ、父のその声に、紅蓮姫が選んだ道だけは、はっきりとしていた。

あれほどのラエスリールの制止にもかかわらず、父の命を啜り続けていた真紅の刀身が、するりと彼の胸元から抜け落ちる。

未だ金闇が強く支配する海辺の砂上に、さくりと音を立てて、真紅の刀身が突き刺さる。

「愚か者が」

冷ややかなその声が、紛れもなく自分に向けられたものなのだと、それだけは確信しながら、ラエスリールは呆然と、紅蓮姫と父を交互に見つめた――。

※

「逸る刃を落ち着かせるどころか、自分まで引きずられてどうする」

冷ややかな声に、小さくはない叱責の響きを滲ませて告げられた言葉に、ラエスリールは息を呑んだ。

それは初めて聞く父の声だったからだ。

父から向けられる言葉は、常に淡々とした響きに満ちていた。自分に関心がないことを隠そうともしない父の声に、幼いころどれほど切ない思いを噛みしめたことだろう。

再会した後、少しだけその響きは変わったように思うが、それは主たる女皇の前に立ちふさがる塵芥に対する不快感であったり、いつまでも不甲斐ない自分に対する侮蔑のそれであったりと、決して嬉しいものではなかった。

だが、この声は——そこに宿る、響きは。

厳しい叱責であることは確かだが、これまで耳にしてきたものとは明らかに何かが違っていた。

父さま……？

思わず父の顔を凝視するが、その静かな面に答えとなるものは見いだせない。

そう……たった今、自らの命を——それも少なからぬ数の命を奪った相手に対する怒りの念さえ浮かんではいなかった。

ラエスリールの胸に困惑が広がっていく。

父はきっと怒ると思っていた。命を奪ったこと——その果てに、彼を繋ぐ枷ごと破壊したこ

とを、「勝手な真似をするな」と怒るに違いないと。

なのに、父がたたえるこの静けさはなんだろう。

怒りはなく、だからと言ってずっと貫いてきた無関心を保っているようでもない。

「父さ……」

呼びかけようとしたラエスリールの声は、構わず続けられた父の声によって遮られた。

「まったく、お前ほど手に負えぬ娘はない」

抑揚のない口調で告げられた言葉に、彼女はびくりと身を震わせた——戦いの高揚のなか、感じたさまざまなことが、単なる自分の自惚れに過ぎなかったのかと……そう思うに充分な無慈悲な内容に。

「あの母の願いも、父の望みも踏みにじる……人間では、確かそういう子供を親不孝者というのではなかったか？」

父であるひとの声には、やはり怒りはない——単に感じたことをそのまま口にしているだけのようにも感じられる。

それでも、その言葉にラエスリールの胸は痛みを覚え、萎縮しそうになる。

「父が望まぬ道ばかり選ぶ……平穏な人生を送ることは、それほどに難しかったか？　世界中

に溢れる普通の無力な人間たちのように、ささやかな幸せとやらで満足することはできなかったのか？　まんまとあの男に乗せられおって……あれが指し示す未来など、我らが望んだものとは真逆のものだと、気づくこともできなかったのか？」

たたみ込むように綴られる問いの本意は、叱責と非難でしかない。

責められている。

だが、どうしてだろう――その言葉はラエスリールの心を傷つけなかった。確かに責められているというのに、言葉は刃を纏っていない。

その理由に気づいた瞬間、彼女を大きく目を瞠った――父は、初めて自分を前に「父」という言葉を用いたのだ！

胸の奥に小さな熱が生まれ、それがまだ完全には消えていなかった氷を融かしていく。

父さま。

「愚かな娘だ。敢えて茨に閉ざされた道を選ぶとは……だが、事ここに至った以上、最早止める手立てはない、か……」

そう告げながら、父たるひとが小さな息を洩らした。

嘆きとも諦めともつかぬその吐息が何を意味するのか、ラエスリールにはわからなかった。

そして、その瞬きにも等しい時間が過ぎた後、父たるひとが口にしたのは、全く別のことだった。

「拾って休ませてやりなさい。その少女は疲れ果てている……休息を与えるのは鞘たるお前の役目であろう？」

指摘されてようやく、ラエスリールは紅蓮姫が砂浜に突き刺さったままであることを思い出した――父の意外な言動に意識を完全に奪われていたのだ。

「は、はい……」

慌てて紅蓮姫の柄に手を伸ばしながら、ラエスリールは忘れかけていた困惑が、再び胸に広がっていくのを感じていた。

態度を変えた父――その心を映したかのように穏やかにして静かな佇まいを見せるこの世界が、何かの兆しに思えてならなかったのだ――。

第四十五章　二つの鍵（前）

1

熱湯の雨が降り注ぐ！

「え、嘘……っっ！」

サティンは驚愕ゆえに反応が遅れた。

そこは、依頼を受けた土地から徒歩で二日ほどの距離にある山間の里だった。

浮城への依頼さえ出せなかった小さな貧しい村は、かつて温泉で潤っていたものの、近辺の火山が活動を止めたことで完全に寂れてしまったということだった。

魔性被害が頻発する中、浮城はその全ての依頼に応じ切れない。

自然、浮城の判断基準に則って、人員派遣が叶うか否かが決められる。

サティンとセスランは、そんな取りこぼしの案件を、ここ数年というもの片付けて回っていた——途中からは事務方の暗黙の協力を受けながら。

依頼を受けた、近隣で起こった「取りこぼし物件」を、それとなく誤魔化しながら解決するというやり方は、サティンとセスランにしかできないことだった。

セスランに護り手はいないが、彼に強い思い入れをしている協力者の妖貴がいる。そしてサティンの護り手は、やはり妖貴だ。

妖鬼や小鬼が束になってかかっても敵わない——強大なる力を誇る存在を傍らに持つ者でなければ、こんな無茶は到底できない。

それでも、必要だと思うから、サティンもセスランも浮城の規に反することを承知で動いたのだ。

それは、「女皇」の宣言が世界中の魔性に発せられるより前のこと。

宣言が為された後は——悲惨の一語に尽きた。

これが最後の機会とばかりに、世界中の魔性が暴れ始めた。浮城への助けを求める文を送る間もなく滅ぼされた里も多いに違いない。

そうとわかる状況で、依頼だけを済ませて、聞こえてくる悲鳴を無視して帰城するなど、どれほど強く浮城の教育を受けている者でも難しい。

魔性もまたこの世界——ガンダル・アルスに生きる者。

創造神ガンダルに許された存在である以上、無闇に狩るべきではない。

浮城創設より何より堅く定められたその掟は、魔性を深く知る者にとっては失笑するしかない綺麗事だ。

人間がいかに異能を持とうとも、そうして技術を磨こうとも、狩れる対象は限定される。魔性における最下層に位置する小鬼か、そのひとつ上位にある妖鬼までしか、人間の力は及ばない。

魔性には、さらに上位が存在することさえ、一部の上層部を除く人間には知らされていない——妖鬼など比較にならぬ強大な力を誇る漆黒の魔性たちと、さらに彼らの頂点に立つ五人の王。

妖貴と妖主の存在は、ことここに至った今でも、世界から伏せられている。

それはなぜか。

簡単だ。

人間が日々を生きていく上で、強大すぎる脅威は害にしかならないからだ。

小鬼や妖鬼の存在にさえ、人間は容易く命を奪われ、心を恐怖と絶望に支配される。

それでも、人間という種族が絶望に打ち負かされないでいられるのは、浮城という存在があ

るからだ。

自分たちには敵わない強大なる恐ろしい魔性――だが、浮城に在る者たちならば、魔性に立ち向かう力を持っている。

自分たちは無力でも、最後の最後には、浮城という最強の味方が動いてくれる。

自分たちの仇は、きっと浮城が取ってくれる。

それは現実から乖離した想いだ。

浮城は依頼を受けた案件にしか人員を派遣しない。依頼には多額の金子が必要だ。

対魔性の人員を集め、養成するために、浮城は膨大な維持費を必要としており、それは大国からの寄付金だけでは賄えないという現実がある以上、無償で人員を派遣するなどあり得ない。

ようやく使い物になるように育った要員を、無償で派遣などできるはずがない。

次世代の人員を育て上げるためにも、浮城の人間は有償の働きで成果を上げ続けなければならない――一部で囁かれる「浮城は貧乏人のためには動かない」という陰口は、このシステムへの批判から生じたものだ。

救える力を持つ者が、なぜ形式に――もっと露骨に言うなら、報酬の額に拘るのか。

かねてより、そうした批判の声はあった。

だが、それは極言するなら「救う力を持つ者は、無償でその力を揮うべきだ」という意味に通じる。

強者は弱者を無条件に守るべきだと。

それは理想ではあるだろう。守る力を持つ者が、抗う力さえ持たぬか弱き同胞を救う。

だが、魔性を相手にした場合、これはどう考えても均衡の取れない理屈なのだ。

どれほど力を育もうとも、魔性を前に絶対の勝利を約束できる人間などいない。敗北は死に直結する——それは、それまでその人物に与えられた教育、食事、環境……それらにかけられた膨大な額の金が霧散するに等しい。

残酷にして冷酷なまでの、命の換算が、これまでの浮城を守ってきたのだ。

それを骨の髄まで刻み込まれるからこそ、浮城の人間はその規から外れない。自身の勝手な私情でこのシステムを崩した時、浮城そのものの存続を危うくすることを知っているからだ。

サティンもセスランも、もちろんこの教育は受けていた。

そして、大半の同胞以上にこのシステムを理解していた。

浮城という存在、そしてそこに住まう者たちを——引いてはその存在によって救われる魔性被害に遭うひとたちを守るためにも、浮城の掟は守るべきだと。

わかっていてなお、その則を乱すような行為に走ったのか。
その理由を克明に論理的に説明することはサティンにはできない。
ただ、感じたのだ、としか。
ラエスリールが翡翠の妖主を倒したらしいことは、知っていたし、そのせいで世界を包む空気が不穏にして不安定なものに変化したことは気づいていた。
それから数年、世界を包む気は不安定なままだった。
不安定なまま世界を覆っていた気は、ある日一変した。
正確な日時はわからないが、恐らくそれはラエスリールが仮死状態に陥った日なのだろうと思う。
自分たちに非好意的であるアーヴィヌスは頑として教えてくれなかったから、これはあくまで想像の域を出なかったのだけれど。
あの日、世界を包む空気の色が、変わった。
人間にも魔性にも――魔性のほうが持っている力は圧倒的に大きいため、客観的に見れば魔性に優位な空気だったとは思うのだけれど――等しく優しかった世界を包む気が、激しく動き、変化したのだ――魔性により優しい方向へと。

世界の天秤が、魔性へと傾いた。

理屈ではない——ただ、そう感じたのだ。

そうして続いて起きた出来事に——覚えた衝撃を外に出さないためだけに、サティンはどれほど努力したことか！

広がる一方の魔性被害——単に数が増えているだけであれば、サティンもセスランも浮城を支える基本の則を破ろうとは思わなかっただろう。

だが、ラエスリールが仮死の眠りに就いて以来、増加の一途を辿った魔性の被害は、到底それだけとは思えぬ恐ろしい何かを秘めていたのだ。

そこでサティンとセスランは、究極の選択を強いられた——いや、半分以上人外魔境のセスランが、自分と同じほどの圧迫感を覚えたとは思えないから、あれは自分だけの決死の決断だったと言えるかもしれない。

ひとりでも多くの魔性と接触することで、世界で何が起ころうとしているのか、かけらでも摑もうと思ったのだ。

だが、結局何もわからぬまま——すべての答えとなる女皇の宣言を知った。

『これを薄々感じてたのか……』

女皇の宣言を聞いた鎖縛が洩らした一言を思い出す。
どういう意味かと尋ねたサティンに、『いや、やつらが焦って人間を襲い始めた理由はこれだったのかと思っただけだ』と彼は答えた。
『本人たちも自覚はしてなかったようだがな、あいつらは皆、急かされるように動いたように思えたんだ』
とも。
その理由が、女皇の言葉なら得心がいく——と。
確かに、女皇の築く新たな世界に人間が生まれないというのなら、遊ぶのも食らうのも、今しかできないことではある。
人間にとってありがたくないその宣言が放たれてから、そろそろ半月になる。
まだ半月というべきか、すでに半月と言うべきか。
世界中の魔性が、人間に牙を剝いてから、それだけの時間が経った。
人間の受けた被害は計り知れない——知らぬ間に全滅した里は数えきれず、たったひとりの魔性に住民の大半を嬲り殺された町もある。
浮城は総力を挙げてその対応に当たっているが、魔性に対抗できる人員に限界がある以上、

全部を救えるはずもない。だが、だからといって諦めるわけにもいかない。

チーム派遣は以前と同じだが、城長たるアーヴィヌスは派遣先で魔性被害に気づいた場合は各チーム長にその判断を委ねることを決定した。依頼ではなくとも、魔性との戦闘を認める発言は、これまでの浮城のやり方に反旗を翻したに等しいが、この非常事態にあって反対する者は皆無だったという。

また、引退した元捕縛師を中心に協力を要請し、魔具を無料貸与することも。

あれほど苦手としていたマンスラムに頭を下げてまで、彼は全力でこの事態を乗り切ろうとしている。

融通の利かない男だと思っていたが、なかなかどうして、浮城の頂点に立つだけのことはある——とは、サティンの正直な本音である。何気なく口にしたのを耳にした鎖縛に「お前はなにさまだ？」と呆れたように言われたので、人前では控えることにしたのだが。

……とまあ、そんなこんなでこの半月というもの、目の回るような忙しい日々を送ってきたわけだが、不意打ちを食らうまで、魔性の気配に気づけないほど集中力が鈍っていたとは思わなかった。

依頼処置を終えてすぐ、近くにも魔性の気配があると鎖縛が言うので、その近辺を探ってい

たところを突然襲われたのだ。

鎖縛と二手に分かれたのがまずかったのか――サティンの目前で、突然地面がぼこり、と沸き立った。

以前、温泉地を訪れた時目にした『坊主地獄』というものに似ているな、とぼんやり思った時点でサティンは確かに集中力を欠いていたのだ。

過去はともかく、今やこの地に温泉は湧かない。そこに温泉地でしか生じない現象が起こったのだ、魔性の仕業に違いないのだ。

すぐに応戦体勢を整えるべきところだったが、本人に自覚がなくとも、相当に疲労がたまった頭は正常に働かなかった。

ぼんやりと、沸き立つ地面を見つめて――どれほどの時間が経った頃だろう。

ぼこり、ぼこり――地面の沸騰が激しくなったかと思った次の瞬間、巨大な熱湯の柱が立ち、泥混じりの灼熱を雨を降らせたのだ！

さすがにここに至って動けないほどサティンの頭も死んではいなかったが、蓄積された疲労が体の反応を鈍らせたのは確かだ。

「嘘」

まずい！

避けきれない！

その刹那、サティンの脳裏に浮かんだのは、泥混じりの熱湯の雨に全身を打たれる自分の姿だった。

無事にはすまない——というか、十中八九、命に関わる。

「鎖縛！」

以前と違い、今では迷いなく口から紡ぎ出されるひとつの名。

それを冠する青年は、呼ばれた瞬間サティンの体を横抱きに、熱湯の雨がかからぬ場所に移動していた。

大地に打ちつける熱湯の雨が凄まじい水蒸気を放ち、たちまち視界が白く染められる。

「馬鹿か、あんたは！　なにぼうっとしてやがる！」

頭ごなしに怒鳴りつけられても、今回ばかりは自分に落ち度があるとわかっているのでサティンは素直に謝罪した。

「ごめんなさい、反省してるわ。いくら忙しくても、これからはちゃんと睡眠を取ることにする。目の前の異常事態をぼんやり眺めるだなんて、我ながら頭の働きが止まってたとしか思え

ないもの」

そんなサティンを前に、鎖縛はなぜか不機嫌そうな顔をした。

……もしかして、自分が言うつもりだったことをわたしが先取りしちゃったのかしら……それで悔しがっているとか……？

こちらとしては本気で悪いと思ったから謝罪したのに、それが気に入らないと言われても困る——いや、実際に鎖縛がそう文句をつけたわけではなかったが。

そう、鎖縛は結局、そのことについては何も触れなかった。

代わりに告げたのは。

「それで、少しは目が覚めたんだろうな。戦ってる最中、意識を飛ばされては、こっちは援護のしようもないぞ」

実に彼らしい、皮肉な言葉だった。

もちろん、この程度で揺らぐサティンではない。

「全身大火傷の恐怖のおかげでばっちり目は覚めたわ。懇切丁寧にお礼をしようという意欲満々だから安心してちょうだい」

にっこり笑って剣呑な言葉を返した彼女に、漆黒の青年はにやりと人の悪い笑みで頷き、そ

うして続けた。

「そうだな、ここいらにいる他の連中にも、人間で遊ぶのも命がけだってことを、思い切り見せつけてやるのもひとつの手だな」

自分の発言と同等以上の物騒なこの提案に、サティンは思わず破顔した。

「まあ、鎖縛！　あなたって、本当になんて素敵に性格が悪いのかしら！」

……言っておくが、これは皮肉ではなく、素直な感嘆の声だった。

しかし、それを聞いた鎖縛が思い切り顔を顰めたのは……無理からぬことだった。

2

蒼穹を二つに引き裂く巨大な亀裂を、チェリクは変わらず見つめ続けていた。
もう何日――いや、何十日も、彼女の眼差しはそこから離れない。
食事をしている時も、眠っている間でさえ魅了眼の能力は解放したまま、そこに生じるかもしれない微かな変化を見落とすまいとしていた。
「お方さま……」
いつまでも動かない彼女に、背後から声をかけたのは、ずっと隠形して控えていた漆黒の青年のひとり――空也だった。
「いつまでそうなさってらっしゃるおつもりなのですか？」
その声に、今は従う主への苛立ちはない。
ただ、人間に過ぎぬ彼女への気遣いが、彼に声を上げさせていた。

傍目には、チェリクの行為はのんきに空を見上げているものでしかない。日がな一日、晴れた日も曇りの日も雨の日さえも、野原に座りこみ、時に立ち上がって体をほぐすように動かしながら、ひたすらに空を見上げている。

魔性の脅威が日に日に大きくなる世界において、それはある意味異様な姿だ。

もし、不安と恐怖に駆られた人間が、彼女のそんな姿を目にしたなら、その尋常でない振る舞いと人間離れしたその美貌ゆえに、彼女を魔性と信じて疑わないだろう。

魔性の世界にあって、美と力は比例する。

だから、前述の誤解を抱いた相手が、少しでも魔性の知識を有する者であるなら、チェリクに手出しをしようとは思わないだろうから安全だ。

だが、世界の大半を占める人間は、そんなことは知らない。彼らにとっての魔性とは、恐ろしい姿をした、恐ろしい力の使い手だ。

人間とは思えぬ美貌のチェリクを見た時、大概の人間はその容姿から弱さを連想する。

彼女を包む圧倒的な気の輝きを視ることのできぬ人間は、その力を推し量ることさえできず、無知蒙昧な思い込みで暴挙に及ぶ可能性が高い。

半月に及ぶ魔性の猛威によって、人間たちの恐怖は最高潮に達していると言っても過言では

ない。

恐怖のあまり、疑心暗鬼に囚われた者も少なくはない。

魔性ではなく不安と疑念に駆られた人間が、同種たる人間を殺す事例も増えつつある。

普通ではない行動を取る者は、人間に化けた魔性ではないのか、いやそうに違いないと断じられ、以前と違う言動を見せた人間もまた、魔性が入れ替わったのだと糾弾され――世界は混乱の坩堝にたたき落とされたも同然だ。

魔性による殺戮が世界にまき散らした血臭と腐臭と妖気が、世界を赤黒く染め上げる――そのなかに暮らす人間が、影響を受けずにすむはずもない。

また、下位の魔性もその影響を強く受ける。

疑心暗鬼の化身と化した人間は、奇異な――としか彼らの目には映らぬだろう――行動を取るチェリクを、か弱い魔性か、魔性に魅入られた異端の娘と見なすだろう。

人間を狩ることに夢中になった下位魔性は、彼女を絶好の獲物と見なすだろう――その意識を、彼らには不可視の亀裂に集中しているチェリクは、本来纏う強烈な輝きのかけらも周囲に放っていないのだから。

人間にも下位魔性にも狙われかねないのが、今のチェリクを取り巻く状況だ。

空也は、それを案じている。

本来なら、そんな心配はする必要もないことだ。彼と宗流が控えている限り、彼女が危険に晒されることなどあり得ない。人間はもちろん妖鬼が束になってかかってきたところで、彼女に傷ひとつ負わせるような自分たちではない。

だが、彼女による命が、容易いはずのことを難しくしている。

彼女を狙う不届き者に対する処分がそれだ。

「ただでさえ噎せ返るような死臭と血臭と腐臭のせいで吐き気がしそうなのよ。お願いだからこれ以上濃くしないで」

……つまり、殺すな、傷つけるなということだ。

それも、安易に襲撃者を余所に転移させた結果、その襲撃者が命を落とすことになれば、これも命に反したことになる。殺さず傷つけず、しかもその命を守れ——というのは、これまで空也がしてきたこととは違いすぎて——宗流は自分よりは器用だが、それでもこの命には苦労させられている——彼としては疲れる。

だが……まあ、その程度のことで音を上げるほど、彼も軟弱ではない。

唯一の主が選んだ初めてにして絶対の伴侶だ。どんな苦労があろうと守りきる決意に変わり

はない。

だから、決して彼女の行動に異を唱えるつもりはないのだ。

だが――。

「失礼ながら、柘榴の君のお言葉を、心から信じるのは危険かと思うのですが……」

そう、チェリクの選択に否やを言うつもりはないが、その根幹にあるのが柘榴の妖主の言葉だというのが、どうにも気がかりなのだ。

「言っては何ですが、かの君は真と虚の間を絶え間なく行き来なさる業に囚われておいでです……真実を語られることも確かにございますが、それと同じほどの確率で虚を真摯に語られます。語られた内容がどちらであるのかは、かの君ご自身ですら理解なさっていないという話も聞いております」

ですから、かの君の言葉にあまりに信を置かれるべきでは――。

赤心からの空也の言葉に、チェリクは一瞬だけ、眼差しを彼に向けた。

この数十日というもの、亀裂からほとんど目を離さなかった彼女が、確かに一瞬、自らの意志で彼に視線を向けたのだ。

そうして、唇の端を微かに上げた。

笑みがこぼれる――それは、美しい者を見慣れた空也の意識さえも一時奪うほどの艶やかさに満ちたものだった。

「ありがとう、空也。その忠告は全くその通りだとはわたしも思っているわ。けれど、それでもわたしはかの方のお言葉を信じようと思うの」

半月以上も前のこと――彼らの女主のもとを訪れた柘榴の妖主が、彼女に告げたのは。

いつ起こるかも知れぬ出来事を待てというものだった。

『いつそれが起きるか……いや、本当に起きるかどうかも断言はできないがな』

そう前置きして、深紅の魔王は彼女に指標を示した。

『あの亀裂に揺らぎが生じる時が唯一の機会だ。その時を置いて外に、あの虚空があんたの魅了眼に屈する隙を見せることはない。いつになるかはおれにもわからないが……何しろあんたの旦那の絶対領域ときたら、おれの支配が及ばないのはもちろん、おれになる前の紅闇が好き勝手に暴れてやがって、時間の流れがめちゃくちゃだからな。あそこで流れた時間が、こっちではどれぐらいになるのか、おれでさえ換算できない。こっちの世界で人間が根絶やしになる前に、向こうでの決着がついてくれることをおれとしても祈っちゃいるんだがね』

その言葉を耳にしてからというもの、チェリクは蒼穹を引き裂くという――残念ながら、空

也の目には見えない——亀裂から目を離さなくなった。
あれから半月——だが、彼女の行動の奇異さに注目する者は少しずつだが増えている。
大半は彼女の並外れた美貌が原因ではあるのだが、このまま時が進めば、奇異で特異な彼女の存在と言動が、空也と宗流では対応しきれないほど巨大な関心を引き寄せないとは限らない——もちろん、彼女が前に下した命を撤回してくれさえすれば、問題はないのだが、どうにもそれは難しそうで……頭が痛いところである。
そうした問題もあるものだから、空也としてはチェリクにはまだ大事に至っていないこの時期に、言動を改めて欲しいと思い、忠言したのだ。
だが——。
チェリクは彼の言葉に首を縦には振らなかった。
そうして、その理由をこう続けたのだ。
「かの方の言動は、宙を舞うコインのごとし——くらくらと表裏を入れ替え、その時々でまったく別のことを語られる。そのことは知っているし、真実そうなのだろうとも思うのよ。あの方に真実はない、という声も、確かにひとつの真実なのでしょうね」
けれど、わたしはかの方に関して、別のことも知っているの。

眼差しは、空也には視えない空の亀裂に定めたまま、彼女は歌うように言葉を連ねた。
「誰もが口を揃えて言うわ、かの君は真と虚を絶えず行き来し、それはかの方自身にもどうしようもない業なのだと。確かに歴史が語っているわ、かの方の言葉には虚実が混沌として入り交じり、誰も何者もそれを見抜くことはできなかった。それゆえかの方の言葉を受けた者は残らず破滅し、かの方の言葉を疑った者も残らず破滅した。かの方と関わることは破滅をしか意味しない……けれど、そうでない存在があることを、わたしは知っているわ」
一息にそこまで続けたチェリクは、そこで小さく息継ぎした。
そうして、囁くように――言を繋げた。
「わたしの、娘よ」
王蜜の妖主と元浮城の城長である魅縛師の間に生まれた異端の娘。
後に母を喪い、父と別れ、ひとの世に混じるも異質さに弾かれ、魔性の贄に差し出され――
その果てに、深紅の魔王を呼び寄せた娘……ラエスリール。
「あの子のことだけは、かの方は決定的に裏切ることはなかったわ」
もちろん、あの方の業がもたらす小さな裏切りはあったようだけれど。
「思うに、それはあの方への信の大きさゆえではないかと思うのよ」

チェリクから発された言葉に、空也は反射的に「馬鹿らしい！」と叫んだ。
虚実入り乱れる王――一瞬前の言葉すら信に足らぬ虚実の王。
そんな相手に信を置くなど、無意味を通り越して愚かとしか言いようのない行為だ。
だが、そんな空也にチェリクは頭を振る。
「あなたの主でわたしの夫であるひとは、厳のごとく揺るがないひと……あのひとを動かすことができる存在がこの世にあるのかどうかも疑うほどに。かの君は、彼の次にこの世界に生まれたお方よ。反動として揺れ動くことこそが業であっても不思議はない……そして、魔性も人間も、信じるべきか疑うべきか、常に心を揺さぶられる。わたしだってそう。あなただってそうでしょう？　わたしの娘も基本は変わらない……けれど」
あの子の場合、一度受け入れた相手に関しては、愚直なまでに態度を改めないのよ。
チェリクがしみじみと洩らした言葉には、限りなく諦念に近い響きが宿っていた。
「馬鹿なの。愚かなの。過去は過去として受け入れなければやっていけない現実というものがある。自分の心を守るためにも、必要な決別はあるわ。けれど、わたしの愚かな娘は、そうした心の保身本能に、とことんと言っていいほど欠けているのよ。馬鹿なのよ」
チェリクの我が子に対する認識は、傍で聞いていても酷い代物だった。

彼女の声音に宿る響きを感じ取れなければ、空也とて「この親子は断絶している」と思ったに違いないほどに。

「でも、その愚直なまでの信頼が、かの方の言葉の真実の部分を引き寄せたのだわ。かの方が虚実入り乱れる混沌のお方だと理解した上で、なおもあの方を信じ切れるのか――もしかしたら、それがかの方のお言葉を真実とする切り札なのかもしれないと思ったの。だから……」

そう言いかけたチェリクの緑柱石の双眸が大きく瞠られる。

視点は空に向けられたまま。

「開いた……」

呆然とした声を洩らしたかと思ったその直後。

チェリクは傲然たる声で、ふたりの妖貴に命を発した。

「揺らぎの根源はわたしが突き止める！　あなたたちは、わたしをそこに導きなさい！」

命そのものを燃やすようなその命令に、空也も側に控える宗流も、従うことしかできなかった。

それほどに絶対の意の込められた声だったのだ――。

※

女皇の居城の広間において、異様な光景が繰り広げられたのは、チェリクが異変を感じた直後のことだった。

女皇、柘榴、白焔の妖主が揃う広間に帰還を果たした王蜜の妖主は単身ではなかった。

その傍らにあったのは、傷を癒された黒髪と左右色違いの瞳を持つ彼の娘――。

女皇の前に立ちふさがった際、女皇が対峙する価値もない塵芥と切り捨てた存在だった。

自ら始末すると宣言し、女皇すら立ち入ることのかなわぬ絶対領域へと彼女を連れ去った王蜜の妖主が、再度彼女をこの現世へ戻すことがあろうとは……少なくとも、この場に在ることを許された者のうち、白焔の妖主には思いもかけぬことだった。

だが、意外の念に息を呑んだのは彼女のみ――女皇も柘榴の妖主もかけらも動揺した様子はない。

しかも柘榴の妖主に至っては、仕方ないと言わんばかりの苦笑まで浮かべているではないか――自分ひとりが蚊帳の外に置かれたという苛立ちに、白焔の妖主はきり、と唇を噛みしめる。

だが、幸いなことに年若い女皇は、いつまでも彼女だけを蚊帳の外に置いておくつもりはな

いらしく、娘を伴い帰還した王蜜の妖主にその真意を問いただした。

「第一のお方。あなたは確か、わたしの手を汚す価値なしとして、その娘御をご自分の領域へと誘われたはず。その娘御をこの場に伴われた真意はいずこに――？」

最古の者にして、この世界第一の者たる黄金の闇の化身が、女皇の前で跪く。

そうして――驚くべきことを告げるのを、白焔の妖主白煉は息をつくのも忘れて聞き入った。

「わが忠誠を誓いし君よ、お許しを。確かに我はこの娘を、我が君が相手をするに相応しくなき塵芥と断じ我が領域にて始末しようといたしました。ですが、その後に露となった事実ゆえに、それはかなわなくなりました」

女皇の瞳が、爛々と輝いた――まるで、何かを期待するかのように。

「その露となった事実とは？」

そんな女皇の気配の変化に気づかぬはずもなかろうに、王蜜の妖主は淡々とした口調で応じた。

「これなる我が娘は、破壊の鍵を持つ身にして、五要の闇全てを従えました。正当なる筋ではないとはいえ、認めざるを得ません」

どこまでも淡々と、王蜜の妖主は告げる。

「これは、あなたと等しく新たな世界の女皇たる資格を持つ者だ、と」

外部から完全に遮断された真空の空間に位置する城の内部だというのに、その声が響いた瞬間、城全体を震わすほどの風が城内を吹き荒れた。

それは女皇の感情の揺らぎがもたらしたものだった。

絶大なる歓喜の念が、虚空に満たされたこの城を揺るがしたのだ――！


危うすぎる薔薇のような

プロローグ

第一印象は、なんと綺麗な娘なのだろう――それに尽きた。
闇や夜を連想させる黒髪は、その印象を払拭するほどに輝かしく艶やかで、真っ直ぐに前を見つめる双の瞳はまるで極上の緑柱石。
マンスラムは生まれて初めて、「奇跡のように美しい」存在を目にしたと、その瞬間思ったのだ。
同時に戦慄を覚えた。
その少女――自分と同年代にしか見えない彼女は美しすぎて、その緑柱石の双眸に宿る光は自分の想像できる範囲からかけ離れすぎていて。
謎めいている――などという言葉では片付けられないと、瞬時に悟った。
直感だけで言うなら、「恐ろしい」というのが一番近い言葉だったかもしれない。

澄み切った緑柱石の瞳――顔立ちばかりではなく、身に纏う空気さえもが、真冬の澄み渡った冷たい空気を連想させ、その前に立つだけのことに知らず怖じけそうになる。

断罪の刃――。

ふと、この一言だけが脳裏に浮かんだ。

今まで目にしたこともないほどに美しいこの同年代の少女は、これまで自分が想像したこともない何かを見つめ続けた結果、そうなったのだ、と。

確信できたがゆえに、マンスラムはその姿から目を逸らすことができなくなった。

そうして、見続けて――。

ある時――刹那。

マンスラムはその少女が大嫌いになった。

1

「お断りさせていただきます」

はっきりきっぱりと、十八歳の誕生日を目前に控えたマンスラムは、浮城の総責任者である城長エーナダイムを前に言い切った。

場所は浮城の城長の執務室――新たな任務を命じられた直後のことだった。

「マンスラム……」

「イヤです」

「マンスラム」

城長であるエーナダイムが苦り切った表情で言を継ごうとするのを、あからさまに拒絶して、彼女は同じ言葉を繰り返す。

「イヤです。絶対にイヤ」

明確な拒絶の言葉であり、それは本来あり得ないことであり、これまでの彼女であれば考えられない態度でもあった。

「マンスラム！」

ついに声を荒らげた城長は、しかし公正なひとだった。

彼女がここまで任務を拒絶するには、それ相応の理由があるはずだと考えたのだ。

「……理由を、教えてはくれないか」

疲れた顔で、そう問いかけてくるエーナダイムに、マンスラムは亜麻色の睫を半ば伏せながらきっぱりと答えた。

「同行者に不満があります」

とんでもない言い分だという自覚はある。

だが、これでも充分緩和した表現なのだ——これ以上言葉を和らげたら、相手を納得させることはできない。だが、もっと正直な胸のうちを晒せば、浮城の人間として言語道断だと責められるのは目に見えている。

同行者が大嫌いだからです——。

そんな言い分を一々聞き届けていたら、浮城の長など務まらない。わかっているから、まだ

しも説得力のある言い分を押し通すしかない。

はたして。

やはり思い当たるところがあったのだろう——エーナダイムは急に黙りこみ、深い息をつきながらひとつの名を上げてきた。

「……チェリク、か？」

わかっているなら訊かないでほしい——とは、決して表に出せない本音である。

しかし、沈黙でもって答えたことで、相手は納得したようだった。

「マンスラム」

大きく——それこそ、命そのものさえも吐き出すような息をついて、エーナダイムが問いかける。

「あの娘が、この浮城にあってすら異端であると見なす一派があることはわたしも承知している。中には、本当に人間なのかと疑う声すら上がっていることも、だ」

そこまでは知らなかったマンスラムだが、過去目にした光景を思えば、そんな疑問が出てきてもおかしくはないと思う。

「君も……そう思っているのか？」

問われた瞬間、マンスラムは自分でも理由のわからない怒りに支配された。
件の少女のことが、今回の任務を拒絶する第一の理由であることに違いはないが、それでもその理由はエーナダイムが懸念するものとは大きく違う。
いや、もしかしたら傍目には似たようなものに映るのかもしれないが、あくまで似て非なるものだ。
一緒にされるなど心外を通り越して噴飯モノである。
「あれがどれだけ人外魔境だろうが、任務に差し障りがなければ受け入れます！　わたしが拒むのは、差し障りがあるからです！　あれは……チェリクは、わたしのことを一個の人間だと認めてません。そんな相手と命を委ねあうだなんて、到底可能とは思えません。だからお断りすると言っているんです！」
浮城におけるマンスラムの任務は、まず例外なく命をかけたものだった。
魔性被害に遭った町や村に赴き、事前調査の結果を基に、災いの源を摘み取る。
それは大抵単独任務で、動くのはマンスラムと、その護り手のふたりである。
そのため、他の面子と組んでの行動はごくごく珍しい。
そうしたこともあり、他人と組んでの任務をいやがる者は多い。はっきり言って、マンスラ

ムもその例に洩れない。

息の合った相棒である護り手と好きに動ける自由度を考えれば、ろくにつきあいもない相手と命を分け合う任務になど関わり合いたくはない。

だが、それも相手によりけりだ。

浮城に集まる人間には限りがあり、その任務のほとんどが単独のものである裏側には、そうでもしなければ追いつけないほどの魔性被害の多さがある。

だから、浮城の上層部は、よほどのことがない限りは、自由に動くことに慣れた住人たちを好きに動かせる。

複数で組ませるのは、よほどのことだと判断した場合に限られるのだ。

言葉で説明されずとも、そうしたことは肌で感じ取れるものだ。だから、マンスラムは今回自分が呼ばれた件が、単独では難しい案件であることは理解していた。

それでも——。

マンスラムは城長が口にした相手とともに任務に当たることはできないと思った。

できるはずがなかった。

七年前に初めて出会った。三年ほど、普通につきあって、友人になれたと勝手に勘違いした。

三年前に、それが錯覚にすぎないのだと思い知らされた。
嫌い、嫌いだ、大嫌い。
だが、それが今回の任務を断る理由ではない。
その事実こそが、一番、痛い。
彼女は――チェリクは。
イズヴァン以外の仲間など、欲していないのだ。
「わたしが要らないんじゃありません」
彼女こそ、イズヴァン以外を欲しがっていないのだ。
「お断りするのは、だからです」
言い切ったマンスラムは、これで終いだと思った。
誰もが納得する理由を挙げ、申し分のない断りの文句を垂れた、と。
思ったのだが――それは早計に過ぎたらしい。
「ならば、問題はない」
晴れやかに言い切るエーナダイムに、今から思えば「どういうことです？」などと問いかけたのがいけなかったのかもしれない。

問われたエーナダイムは嬉々としてその事情を語ってくれたのだ。

今回の依頼に関して、調査を命じた結果、通常の単独任務では片付けられないかもしれないとエーナダイムが思った時。

彼の脳裏に真っ先に浮かんだのは、こうした際にまず筆頭にあげられる人材であるイズヴァンとチェリクであり。

だが、それではその側につかせるには誰を選ぶべきか――。

心底迷うエーナダイムを前に、チェリクはあっさりとマンスラムを名指ししたのだという……。

その事実を聞かされた瞬間のマンスラムの胸中はといえば、嵐などという一言ですむものではなかった。

なにをぬけぬけと！

馬鹿にするにもほどがある！

あれほど、あれほど！

わたしの意気地をぶったたいて粉々に砕いて水にすら溶けてしまうほどにしてくれたくせに！

いったい、どういうつもりで、再び組もうなどと言えるのか。
「あっちはいいかもしれませんが、わたしはイヤです！」
きっぱりと言い切った彼女に、しかし今度はエーナダイムも譲らなかった。
「マンスラム。もし、わたしの懸念が正しかったなら、無理に君に命じようとは思わなかっただろう。あのふたりが求めている君の能力は、ひどく繊細なものだと認識しているからな」
その言葉に、ひやりとするものを感じる。
チェリク、にそのことを告げた覚えはない――いつかは話せる日が来るかもしれないとは思っていたが、その日が来るまえに、関係が破綻したからだ。
だから、チェリクが自分のあの能力を求めているとは思えない。だが、彼女の保護者である破妖剣士には、薄々気づかれているのではないかと思うことがあった。
もしそうなら、チェリクが知っていてもおかしくはない。
だが、だとしたら――。
最悪だわ。
胸中でつぶやき、マンスラムはそっと息を吐いた。
「……まさかとは思いますが、霊泓を求められているのですか？」

どうか否定してほしい――という心からの願いは、エーナダイムの顔を見た時点で粉々に砕け散った。

エーナダイムは同情的な眼差(まなざ)しを彼女に向けながら、静かに頷(うなず)いたのである――。

2

「ひとを一方的に呼び出すだなんて、ずいぶん偉くなったものね」

城長エーナダイムから、仕事を命じられた後、マンスラムはすぐにチェリクの私室を訪ねることになった。

詳しい内容はチェリクから聞くように、と言われたからだ――もちろん、今回の魔性被害のおおよそのことは説明されたし、聞き取り調査を元に作成された現地の報告書も読ませてもらった。

だが、それらはあってもなくても変わらない――いや、謎めいた今回の事件の手がかりになるとは到底思えない内容でしかなかったのだ。

こんな状況で現地に向かうのは、いくらイズヴァンとチェリクでも、雲を摑むような話ではないのかと、素朴な疑問を口にしたマンスラムに、エーナダイムは、

「いや、彼らは……少なくともチェリクはもう少しはわかっているようだよ」

と言って、苦笑まじりに続けた。

「わたしも一応の説明は受けたんだがね、正直なところよく理解できないでいるんだ。君の霊辿についてもそうだが、わたしは特化した能力の性質をよく呑み込めないのでね。なぜ彼女がそう考えたのか、ひとつの結論にたどり着いたのか、理解できないから、得心もいかなくてね。そんな状態のわたしでは、君に満足な説明ができるとは思えない」

自らの弱点とも言うべき部分を、隠さず打ち明けるエーナダイムの態度は誠実なものである——だが、上に立つ者として、下の者を従わせるためには、誠実なだけでは難しいのではあるまいか、とふと考えずにいられなかった。

そんなマンスラムの胸中を読んだのか、エーナダイムは悪戯めいた仕草で片眼を瞑ってみせた。

「いつもなら、事態の把握度がどうあれ、もっとはったりを効かせているから、そんな心配そうな顔をしなくてもいい。今回そうしないのは、しても意味がないからだよ。大見得を切ったところで、チェリクから話を聞けば、わたしが何もわかっていないも同然であることは明らかになるんだ。かかなくていい恥はかきたくない」

そう言って、彼は「だから、後の話はチェリクに直接聞くといい」とマンスラムを執務室から退室させたのだ。

扉を閉じる寸前に、「そうそう、彼女は今日は部屋から一歩も出ていないそうだよ」と告げてきたのは、そのまま相手の部屋に行けという言外の指示だったのだろう。

チェリクの姿を求めて、あちこち捜し回らずにすむのはありがたいが、なぜ自分が彼女のところに足を運ばなければならないのかと思うと、もともとよろしくない機嫌は、降下の一途を辿るばかりだ。

それでも、エーナダイムに押し切られてしまった以上、チェリクとの絶縁状態には一応の終止符を打つ必要があり、それは早いに越したことはないのだ――少なくとも、この仕事を完遂するまでは。

そんな思いが、チェリクの部屋の扉を開けるなりの第一声となったのだ。

三年ぶりに訪れた黒髪の少女の部屋は、記憶にあるまま、何も変わっていないように見えた――三年前までは、来るたびに小物や家具の配置が変わっていたことを思うと、この部屋だけ、時間から取り残されたような印象を受ける。

だが、そんなはずはない――住人である少女は、確かに三年の時を経た姿をしている。

絶縁宣言をした時の、まだ子供っぽさの残る顔立ちは、この三年で大人の女性のものへと確実に変化している。濡れたような艶やかな黒髪に、極上の緑柱石の双眸は、彼女の成熟とともに迫力を増している。

遠目に見かけることはあったから、それは知っていたはずだが、こうして相対してみれば、その変化は思っていた以上に大きかったのだと悟る。

その印象は、相手の唇が開いた瞬間、さらに大きくなった。

「マンスラム。久しぶりだというのに、ずいぶんご機嫌斜めなのね。残念だわ、あなたの穏やかな笑顔と声が、わたしは大好きなのに」

絶縁されたことなど忘れたかのように――親しげに語りかけてくる声は、けれど確かに三年前のものとは違う。

キイの高さが消え、落ち着いた大人びたものに変わっている。

そう、彼女の態度がどうであれ、三年の時が流れたのは確かな事実だ。

だが、チェリクの眼差しや声音が、そうと感じさせない――昨日別れた友人に、朝の挨拶をかけるようなその気安い態度に、マンスラムは小さくはない苛立ちを覚えた。

それは、既視感を覚えるからだ。

疎遠になった間柄であろうと、再会した際は、まるで昨日別れたばかりのように振る舞い、過去を水に流す提案をするのは、何を隠そう自分の十八番――そっくり同じことを目の前でされるのは、思った以上に気に障ると知った。

大好きなのに――花がほころぶような笑顔で告げられた言葉にも、喜びは覚えない。

その真意を、今の自分は知っているからだ……上質のお手本として、彼女は自分に好意的なのだ。つまり、お手本を身近で観察するために、親しげに見せている。

昔と何も変わっていない。

「わたしも、誰にでも愛想を振りまけるほど人間ができてませんからね」

精一杯の嫌みを込めてそう告げると、チェリクは驚いたように目を瞠った。

「もしかして、あなたに足を運ばせたことが、それほど気に障ったの？　もちろん、わたしからあなたを訪ねることも考えたのよ？　でも、あなたの部屋は、個室とは名ばかりで、いつも誰かが来ていて、悩み相談室のようになっているじゃない。内々の話をするなら、わたしの部屋のほうが都合がいいと思っただけなんだけど……気を悪くさせたのならごめんなさい」

チェリクは素直に謝罪したが、その内容がどこか……ずれている。

彼女の指摘通り、マンスラムの部屋には友人や後輩が、よく訪ねてくる。いつ誰が来るかも

知れない場所で、これから向かう仕事の話を落ち着いて話すことは難しいというのは正しい。護り手たちによる情報交換で、各人が受けた仕事に関する守秘義務はあまり守られているとは言えない状況ではあるけれど、それでも浮城の住人たちには、受けた依頼の内容を守る義務が課されている。

だから、チェリクがそのことを考えて、マンスラムを自分の私室に呼んだことは筋の通ったことである。

マンスラムとしても、過去のことがなければ、この程度のことで目くじらを立てたりはしなかった——そう、あの過去のことさえなかったら！

あれを何とも思っていない、その神経が信じられないと言いたいんじゃないの！

危うく怒鳴りつけそうになるのを、マンスラムは必死に堪えた。

この手の感情の爆発が、相手に通用しないことは過去に学習済みだったからだ。

糠に釘……糠に釘。相手はどろどろの糠床——釘は何の役にも立たない。

必死に自分に言い聞かせながら、マンスラムは忍の一字で黒髪の少女と対峙する決意を固めた——つまり、今回の仕事で必要な情報だけ、早々に引き出すべきだと判断したのである。

「エーナダイムさまから、詳しい話はあなたから聞くように言われたわ。わたしの霊迦が必要

なのだとも……どういうことか、説明してくれるかしら？」

相手の一見友好的に見える態度を切り捨てるように、いきなり核心を衝く質問を放ったマンスラムに――彼女の予想通り、チェリクは不快感をかけらも見せなかった。

覚えた不快を隠しているのではない――そうではない。

チェリクは自分の言動に不快を覚えていないのだ。

彼女のことを何も知らずにいた頃なら、何という寛容さかと感心したかもしれない。同年代の少女がそこまで感情を抑制する術を身につけていることに、逆に痛ましさを覚えたかもしれない。

だが、マンスラムは知っている――知ってしまった。

チェリクは決して寛大ではない。また、感情を抑え込む術に長けているわけでもない。彼女は単に――。

人間の心というものに、通じていないだけなのだ。

※

マンスラムが浮城に来たのは、彼女が十一歳になる直前のことだった。
特異な能力を継承する一族に生まれた彼女は、その能力の高さから時代の一族の重鎮候補として扱われていた。
浮城とは、何の関わりもなく、一生を終えるはずの身の上だった。
だが、里の近くで起こった魔性被害が、彼女の運命を大きく変えた。
魔性によると思われる、隣村住人の失踪――それを調査するために、浮城から派遣された調査員と彼女が偶然出会ったことがきっかけだった。
とはいえ、それは別に劇的なものではなかった。地元調査を任されたその人物は、普通からは考えられない方向音痴であったのだ。
西日が照り注ぐ中、東に向かうつもりで太陽を目指すという……どんな子供であってもあり得ないほど、方向感覚がおかしいひとだったのだ。
そんな人材が、なぜ調査員として務まっていたのかと言えば、魔性による感覚幻惑の術が仕掛けられている場所に限定して、彼の感覚はぴたりと正確に働くから、なのだとは……後に知ったことだったけれど。
だから、出会ったのはそのひとのとんでもない方向音痴のおかげだった。

村の外で不穏な気配が渦巻いていると気づき、そこに人の死が絡んでいるのを感じ取り、どうしても気になって村の外れに内緒で出かけたマンスラムと、常識外の方向音痴であるそのひとが、ある日の夕方出会ったのは、本当に偶然以外の何ものでもなかった。

だが、その出会いがマンスラムの未来を変えた。

閉ざされた村で一生を飼い殺しにされて終えるのだと、十に満たぬ彼女が捕らわれていた諦念から、そのひとが解放してくれた。

そのひとと知り合い、つきあうことで外の世界の幾ばくかに触れた彼女は、村では必要ないものとされた、ある種の異能を発揮したのだ。

それを目の当たりにしたそのひとは、マンスラムを浮城に来ないかと誘った——彼女が生まれ故郷を好いていないことに気づいただけでなく、村が彼女を生涯飼い殺しにするつもりであることを見抜いたためだ。

マンスラムは、一も二もなく頷いた——本来気高いものはずである役目が、醜く歪んだものとなっていることを、彼女は誰より感じていたのだ。

それでも、決して村を抜けることはできないだろうと思っていた——村は古来からの役目に固執しており、その役目を果たすに充分な能力を持つ自分を手放すはずがない。

幼い彼女は、そう諦めていた——だが、それすらも吐きだして「無理だと思う」と告げたところ、方向音痴の浮城の調査員は、無駄に自信ありげに「大丈夫！」と保証した。

そのひとのとてつもなく頼りにならない方向感覚を痛感しているだけに、本当に信じて大丈夫なのかと疑わなかったと言えば嘘になるが、どうせ駄目でも村で飼い殺しにされるだけだと、半ば投げやり気味に、マンスラムは賭けた。

そうしたら……勝った。勝てて……しまった。

信じられなかったが、彼女は確かに村の呪縛から解放され、浮城という新たな世界を手に入れたのだ。

あのひとが、そのために浮城に強く訴えかけてくれたのだと、後に知った。

だから、マンスラムはそのひとのためにも、浮城で成果を上げるべきだと思った。

なるべく敵は作らず、学ぶべき相手からは存分に学ぶ——幸いにして、浮城は魔性被害を最低限に収めるために、よほど特異な能力や技術を除けば、懐に入った者たちに対しては寛大だった。

学べる者は最大限学ぶべし。

その方法がたとえ相手の技術を盗むことに繋がろうとも、浮城にあっては非難されることは

なかった。

マンスラムにとって、それは理想的な環境に思えた——少なくとも、最初の頃は。

そうして……浮城での在り方を身につけつつある頃に、チェリクに出会ったのだ。

第一印象は、凄まじいの一言に尽きた。どこまでも、なにもかもが圧倒的存在感に満ちあふれたその少女を、他にどう表現していいのかもわからなかった。

少なくとも、他の浮城の住人たちのように、たやすく「学ばせて」くれる相手でないことだけはわかった。

少女は——とてつもなく、わかりにくく、しかも不可解な眼差しをこちらに向けてくるのだ。

しばらくの間、その眼差しの意味を考えこんで、答えを導き出した時、マンスラムは一瞬その内容を信じられなかった。

自分は、彼女に観察されているのだと——。

そうと認めた場合に、湧き上がってくる疑問はあまりにも多く、その答えを想像するだけでマンスラムの脳は破裂しそうになる。

だから、彼女は一旦その考えを棚上げすることにした。

思えば、自分も隔絶された村から出てきた経験不足を補うために、極力他人と衝突しないよ

うに振る舞ってきたのだ。

その中に、周囲を観察し、その結果を読み取ってきた行為がないとは言えない。

チェリクの場合、自分以上にあからさまではあるけれど、それをやっているつもりなのかもしれない、と。

だから、気にする必要はない、と。

必死に自分にそう言い聞かせて、チェリクとのつきあいを重ねた。

チェリクはそう思わせるだけ、魅力的な存在ではあったのだ。

特別な依頼を除けば、保護者であるイズヴァンとしか組まない、彼と彼の護り手と彼女自身が下した護り手に向ける表情や態度を、他の誰にも見せることがない——そのことに気づいてもなお、思い違いかもしれないと期待せずにはいられぬほどに。

後にして思えば、それこそがチェリクの魅了眼（みりょうがん）の魔力だったのかもしれない。

魔性にしか発揮されないとされる魅了眼だが、魔性すら魅了する輝きが、人間に対して無意味であるわけがないのだ。

たとえば、その生来の美しさ、生来持つ魅了眼の放つ輝き——それらが人間を引きつけない保証はない。

いや、現実的な力を前提にする魔性以上に、目に見えるものに左右される人間にこそ、その影響力は大きかったと言えるかもしれない。

違和感を覚えては、気のせいだと自分に言い聞かせ、それでもまたしばらくすると同じ違和感に惑わされる。

マンスラムは……その繰り返しに、早い話食傷してしまったのだ。

チェリクの魅了眼に惑わされているのだとか、それこそ彼女が人間でない証拠だとか、彼女の言動に振り回されるのは、彼女が魔性が差し向けた尖兵だからなのだ、とか。

うんざりするほど、当時の浮城にはチェリクにまつわる噂が溢れていた。

そんなチェリクと親しくつきあっていた——と、周囲には認識されていた——マンスラムには、「実際のところはどう?」と言った確認を求める問いかけも多く……早い話、彼女は我慢の限界に達していたのである。

気になる点が皆無であれば、自身も詮索されるのがうっとうしいと感じる事情を抱え込んでいたマンスラムも放っておいただろう。

けれど——いかんせん、彼女には気になってしまうことがあった。

だから、ある時、問いかけてしまったのだ。

「どうして、わたしを探るような目で見るの？」

と。

3

時折観察するような目を向けられていることには気づいていた。
決してぶしつけではないが、ことあるごとに感じる視線は熱心で、けれどそこには純粋な興味しか宿っていないのが不思議で、マンスラムは尋ねずにはいられなかった。
「どうして、そんなふうにわたしを見るの？」
と。
漆黒の髪に極上の緑柱石の双眸を持つ少女は、悪びれることなく、だがこちらには意味不明な答えを返してきた。
「あなたは歳が近いし、性別も同じだし、周りからも好かれているようだから、イズヴァンの宿題にはぴったりだと思って」
イズヴァンとは、黒髪の少女――チェリクの浮城における保護者である破妖剣士の名である。

決して派手な手柄を立てるひとではないが、堅実に依頼をこなすことで上層部の信頼も篤い。

そのひとが、いったいこの少女にどんな宿題を出したというのか——不思議に思ってその内容を尋ねたところ、少女は「しまった」と言いたげな顔になって、強引すぎる話題の転換でもって誤魔化してしまった。

あまりにも強引で、無理のある話運びに、その気になればそこを突くことは不可能ではないと感じたけれど、その時のチェリクの様子に必死すぎるものを感じ取ってしまったものだから敢えて突っ込むことができなかった。

それでも、一度気になったことは、そうそう忘れられるものではない。

マンスラムはチェリクの不在を見計らい、その件に関してイズヴァンに直接尋ねることにした。

「チェリクに出した宿題とは何なのですか？」

未だ本音を隠しているのは漠然と感じてはいたけれど、彼女とはそこそこ親しくなれたと思っていたマンスラムとしては、是非とも解明しておきたい謎だったのだ。

だから、ずばりと切り込んだのだが——。

彼女の問いに、逆にイズヴァンが難しい顔で考え込んだのには驚かされた。

「……宿題……」

ため息まじりに洩らされた声音には、そう受け取られたことがショックだという落胆の響きがあったのだ。

どういうことなのだろう――思わず首を傾げたマンスラムに、イズヴァンは苦いものを無理矢理呑み込んだような顔で謝罪した。

「……ずいぶん、君には迷惑をかけたようだ。すまない」

「迷惑だなんて……そんなことは……」

ない、とは言い切れないことが、語尾を弱らせた。

イズヴァンが懸念しているほどに大仰ではないものの、確かに何かにつけあの眼差しに追いかけられることで、落ち着かない気分にさせられたのは事実だったからだ。

だからこそ、彼が何を思ってどんな「宿題」をチェリクに与えたのか知りたいと思ったのだが――。

「宿題、とは……」

限りなく嘆きに近い彼の洩らしたつぶやきに、それが彼の本意ではないことを悟ってしまった。

「未だに、そんな風に受け取っていたのか」

軽い頭痛さえ覚えている様子の彼に、それ以上尋ねるのは憚られ、訳もなく罪悪感まで覚えてしまった彼女に、三十代半ばのはずだというのに、なぜかもっと年かさに感じられる——原因は彼の沈鬱な表情だ——破妖剣士は、逆に「すまない」と謝ってきた。

「あの子は……チェリクは、少々……いや、かなり特殊な環境に育ったせいで、人間とのふれあいやつきあい方をほとんどと言っていいほど知らないんだ。そのくせ、負けん気だけは強い性格で、放っておいたら浮城でさえも孤立するのは目に見えていたから……少しは周囲を見習って言動を改めろと言ったことがあるんだ。その時、誰を見習えばいいのか訊かれて、最初は自分で考えろと言ったら、とんでもないやつの言動を真似るようになったものだから……それで、君の名を挙げた覚えがある。捕縛師としてだけでなく、特異な才能を持ちながら、それでも君は人に馴染み、つきあっていこうとしていたから」

ああ、このひとは、自分の事情を知っているのか。

彼は決して明らかにしないし、それを自分に気取らせたくもなかったのだろうけれど、わかってしまったものは仕方ない。

魔性に対応しない、自分の異能——。

それを知った上で、手本に示したということは、件の少女もまた相当な訳ありに違いない。
それでも、失礼なことに変わりはないけれど。
「……すごく、というか、申し分なく礼儀正しく振る舞ってますけど……つまり、あれは彼女の本性ではないというか、擬態なわけですね？」
好意的な態度を崩さない少女――申し分ない態度であるのに、どうしても素直に受け入れられず、落ち着かない気分を味わわされた理由がわかった、と思った。
イズヴァンは否定しなかった。

※

「問題は、遺体の状態なのよ」
過去に思いを馳せていたマンスラムは、チェリクの声に意識を現実に引き戻された。
ぼんやりしていたわけではなかったが、相手の言葉を唐突に感じるぐらいには、意識が過去に向いていたということだろう。
「損壊が激しすぎて、誰のものかわからないということ？」

魔性の被害者には珍しいことではない——人肉を好む妖鬼など、巣穴に食い散らした人間を放置している場合もある。

そうした場合、個人の特定が難しいのは言うまでもない。顔や特徴のある部分が残されていればいいが、そうとは限らないのだから。

「遺族への配慮ができるようになったのは、成長したと言ってあげてもいいけれど、そのためにわたしに霊迴を使わせるつもりなら、今からでもエーナダイムさまのところに乗り込んで断ってくるわよ」

無残な被害者の姿に、心が痛まないわけではない——そんな姿を目にした家族の悲嘆も想像できる。

被害者の魂を安らかに眠らせたいと、マンスラムも思う。

だが、そのために霊迴を行うのは、現実的ではないのだ——マンスラムはひとりしかおらず、霊迴の行使に伴う心身への負担は生半ではない。そちらを優先していては、本来の捕縛師としての仕事を全うできないのだ。

被害者の魂を、行くべき場所へ導く……そのために、元凶である魔性に割ける力がなくなるのでは本末転倒というものだ。

……まあ、今回はチェリクとイズヴァンさまがいらっしゃるから、そちらは丸投げしていいということかもしれないけれど。

かつて一度だけ目にした彼らの戦いぶりを思い出し、マンスラムはそっと息をつく。

彼らが滅多に他の人間と組まないのは、浮城の住人にとって幸いだとつくづく思う——あれを目の当たりにしてしまえば、大抵の者は深刻な自信喪失に陥るに違いないのだから……。

ふと、またしても過去の光景に意識が向かいそうになったマンスラムを現実に引き留めたのは、「そんなわけないじゃない」というチェリクの冷ややかな声だった。

「誰が、その程度のことであなたの異能を頼るものですか。一度そんなことをしたと知れたら、不公平感からあなたがひっぱりだこになってしまうのは目に見えてるじゃない。被害者と遺族の心の安寧のために、あなたの寿命を縮める気はないわ」

冷淡にさえ聞こえる内容だが、チェリクの指摘は正しい。

全ての魔性被害者の魂に安らぎを与えることなど、マンスラムにはできないのだから。

「……ちょっと、安心したわ。でも、それではなぜ、今回に限りわたしの力が必要なの？」

心情的な理由でないのなら、そうしなければならない現実的な理由があるはずだ。

尋ねたマンスラムに、チェリクはこともなげに答えた。

「遺体自体は綺麗なものなのよ……最初はね」

事実、眠っているようにしか見えないため、半日以上死亡に気づかなかった例もあったらしい。

「最初は、と前置きするからには、途中で変化するということかしら？」

それも、恐らくは望ましくない方向への変化に違いない。

チェリクが神妙な顔になって頷いた。

「ご明察。目の前で遺体が損壊するだけなら……いえ、それも遺族にとっては小さくはない衝撃でしょうけど、まだましと言えるのよ」

淡々とした口調で告げられる内容は、聞いているのが浮城の住人でなければ、情に欠けると受け止められても仕方ないものだ。

だが、情にこだわりすぎていては、浮城では長生きできない——どこかで一線を引く非情さを持たなければ、狡猾な魔性を相手取ることはかなわないのだ。

「問題はね、遺体が異形化してしまう例が少なくないということなの。上位妖鬼程度の外見なら、誤魔化すこともできるけれど、中には小鬼のような姿になってしまうものもあるらしくて……そのせいで、村を追われた家族もいるらしいわ。人間に化けた魔性を匿っていたと誤解さ

れてね」

痛ましいの一言に尽きる――大切な家族を失ったばかりか、濡れ衣を着せられ住む場所を追われるなど悲惨すぎる。

「……それで、あなたはその変化の原因は何だと思っているの？」

問いかけたのは、チェリクに魅了眼があるからではない。

彼女の強大な魅了眼は、目にしたあらゆる事象を読み解くことさえ可能とするものだが、さすがに現地から遠く離れたこの場所では無理だということはわかる。

マンスラムがそれでも尋ねたのは、チェリクが明晰な頭脳の持ち主であることを知っているからだ。

魔性の命すら読み解き支配する彼女なら、不可解な遺体の変質の原因に、すでに思い当たっていてもおかしくはない。いや、そうでなければ、自分を必要だと判断するはずがない。

そんな確信が、マンスラムにはあった。

はたして――。

チェリクは「断言はできないけれど」と前置きした上で、こう答えた。

「今回の件の魔性は、人間を殺すことが目的なのではないわ。目的は人間の魂よ。どんな力を

用いてかはわからないけれど、魔性は殺した人間の魂を捕らえて……そうして、悪趣味な遊びに興じているのよ」

と。

4

目的地はゴダル――浮城から北東に位置する小国の国境である。
転移門のおかげで、移動には三日もかからない距離にあるため、イズヴァン、チェリク、マンスラムの三人の荷物は必要最低限な量ですみ、おかげで移動に苦労することもなかった。
転移門を出てすぐに、チェリクが野生の馬を呼び寄せてくれたおかげで、到着はさらに早まることになりそうだ。騎乗の訓練を積んでいない野生馬にもかかわらず、馬たちは従順で、彼らを乗せることを嫌がるそぶりひとつ見せなかった。
チェリクの魅了眼のおかげである――常々魅了眼の対象は魔性に限らないはずだと思っていたマンスラムの説は、これで証明された。
「……まあ、便利よね」
よく馴らされた馬を買うことを考えれば、元手がかからない上、降りた後は野に返せばいい

のだから、都合がいいことこの上ない。

そんなことを考えていると、チェリクがそばに——とはいえ、ふたりとも騎乗しているわけだから、それなりの距離はある——近づいて来た。

「言っておくけれど、いつもこんなことをしているわけではないわよ。特別に急ぐ必要がなければ、きちんとイズヴァンの用意する乗り物を待つわ。あなたを巻き込んだことも含めて、今回は特別なの。わたしは一刻も早く、この仕事を片付けたいの」

視線は前方に向けたまま、きっぱり告げる彼女の声には強い決意が宿っている。

マンスラムが知る限り、チェリクがこれほど意欲に燃えて仕事に当たるのは珍しいことだった。人間の心の機微に通じているとは言い難い彼女は、常に冷静さを失わない態度を貫くからだ。

何が、彼女をやる気にさせたのだろう、とマンスラムは気になった。

被害者やその家族への同情ではない。それは彼女自身否定した。人間を玩具扱いする魔性を不愉快に感じたのかとも思うが、そうした魔性は少なくない。

義憤以外に、何か理由があるはずだと思うが、そこまで突っ込むのも躊躇われる。

彼女に興味を惹かれても、いいことなどひとつもないことは、三年前にはっきり思い知らさ

れた。同じことを繰り返して、自分だけ泣きたくなるような思いを噛みしめるのは二度と御免被りたい。

それに、チェリクがやる気になってくれるのは、こちらとしてもありがたい。今回の仕事は、早々に解決するだろう――本気になった彼女の双眸から、何者も逃れることはできないのだから。

仕事さえ終わってしまえば、自分がチェリクとつきあう必要はなくなる。さっさと浮城に帰って、日常に戻ってしまえばいい。

人間の心を解さぬ相手に、自分だけが囚われるのは愚かなことだ――自分は為すべき仕事に全力をあげればいいだけだ。

これが、最後――。

軽く唇を噛みしめながら、マンスラムはゴダルで待つ霊迦のみに集中することにした。

※

依頼主であるその村長は、派遣されてきた浮城の面子に、最初ひどく驚いたような顔をした。

まあ、無理はないだろう。破妖剣士であるイズヴァンはともかく、自分とチェリクはどう見ても充分な経験を積んだように見える年齢には達していない上、お世辞にも実戦向きとは言い難い容姿の主なのだから。

世間が浮城の住人に対して抱くイメージは、屈強な破妖剣士というものが圧倒的に多い。人間など素手で引き裂ける魔性を相手に戦うのだ、目に見えない不可思議な力を駆使するというより、真っ向から力勝負で勝り得る体格の主を想像しやすいのだ。

女性で若年な自分たちを見て、村長の双眸に、驚きの後微かな失望の色が浮かんだのは、だから理解できる。もしイズヴァンという、彼らにとってわかりやすい存在がおらず、自分たちふたりだけであったなら、村長ははっきりと落胆の色を見せただろう。

実際、マンスラムが単独で派遣された依頼では、そうしたことは珍しくない。

捕縛師や魅縛師の能力が不可視の領域に属する以上、それは仕方ないことだ。

だから、マンスラムもその反応に一々感情を乱したりはしなかった——イズヴァンがいるおかげで、村長との交渉に手間取ることもないのだ。ここはありがたく、イズヴァンを頼らせてもらおうと思った。

つまり、村長をはじめとする村の面々との話し合いは、全部彼に丸投げしたのである——霊

辿のために、一番新しい遺体を見せてもらいたい旨も、彼を通じて頼んでもらった。

まるで強そうに見えない外見の自分が、あれこれ説明しながら頼むより、頼りがいのありそうな彼に「必要だから」と言ってもらうほうが、説得は格段に容易いのだ。

ああ、チェリクはイズヴァンといつも組んでるから、そういう面倒ごとからは無縁でいられて羨ましいわね——とは、マンスラムの偽らざる本音だった。

……イズヴァンにしてみれば、冗談ではないのだろうが、まあ、せっかく利用価値の高い外見と能力を持っているのだ、これも有効活用のうちだと思ってもらうしかない。

被害の拡大を防ぐためにも、迅速な行動は必要だ。

ならば、些事に拘っている場合ではない。

そうして、マンスラムが案内されたのは、村はずれに建てられた古い小屋だった。

遺体の変形を受けて、即席で用意された遺体安置所なのだろう。粗末な筵に横たえられた遺体は二——ひとつは四肢を引き裂かれており、もうひとつはどす黒く変色した肌から骨とも牙ともつかぬ白い突起が五本ほど生えたものだった。

遺体発見当初は、眠っているようにしか見えなかったという話だから、これはその後変化したものだ。

痛ましさに、胸が締めつけられる。霊廻を司る一族に生まれたマンスラムには、一目でそれが人間以外の何ものでもないことがわかった。無残に命を摘み取られた挙句、残された体まで貶められる……それはあまりに酷すぎる。

ふつふつと湧き上がってくる怒りを宥めながら、マンスラムは背後を振り返った。

チェリクがいた。人間の心などかけらも理解していない少女は、この光景を前にしても感情らしい感情を表に出してはいなかった。

代わりに、その極上の緑柱石の双眸に浮かんでいたのは、透明な——どこまでも透明な、澄んだ泉の水面を思わせる静かな思いで。

これなら、背中を任せられると、マンスラムは思った。

理屈でもなんでもなく、ただそう直感したのだ——今のチェリクになら、命を預けられる、と。

それは勘違いかもしれないけれど、それでもこの澄み切った瞳と、この痛ましい姿を強いられた亡骸を前にして、自分が為すべきことを為さぬわけにはいかないと。

確信した。

息を整え、目を閉じる。

そうして彼女は宣言した。
「霊迴を、始めます」
異形化した遺体に躊躇いもなく触れた彼女に、チェリクが嬉しそうな眼差しを向けていたことに、当然のことながら彼女は気づいていなかった。

※

霊迴とは、浮城とは全く別の場所で生まれた、魔性とは関わりのない異能だった。
もともとは、肉体の死以外の理由で、肉体から飛び出した魂を捜し出し、元の場所へ戻す力だったと聞く。
それが発展し、非業の死を遂げた魂、あるいは不慮の死を迎えたせいで、本来死を迎えた瞬間に指し示される『行き場所』を見失ったそれを、正しくそこに至る道へと導く力へと変化した。
死した人間の魂を、正しく導く――それゆえに『導魂』とも呼ばれる力である。
マンスラムはその力を受け継ぐ一族に生まれ、その力の強さゆえに一族の期待を背負う存在

でもあった。一族が、正しく『導魂』の在り方を守る生き方を選んでいたなら、彼女は一族の期待するまま、次期後継者となることを受け入れただろう。

だが、彼女が物心ついたころには、一族はその在り方を歪めていた。

すでに寿命の尽きた肉体から飛び出した魂を、無理矢理肉体に引き戻すことで、利得に浴することに狎れきっていた。彼女の飛び抜けた才能も資質も、本来の目的ではなく、巨額の富が約束された依頼のためだけに揮うことを求められた。

だから、マンスラムは自分のその力があまり好きではない。

だが、今は——今だけは、そうではないと思った。

罪もないのに命を摘み取られ、さらには残された体までも蹂躙されることとなった人間の魂——その在処を見つけることは、本来の目的にどこまでも近い。

どこ……？

異形化した遺体に触れながら、マンスラムは必死にその魂の行方を追う。

どこにいるの？　あなたは、いま、どこにいる……？

捜す——断ち切られた魂と肉体を結んでいた糸の緒を。

必死に意識を凝らして、懸命に魂をすり減らして——離れてもなお、未だ魂が受けた衝撃を

肉体が示すその繋がりを信じて。

どこにいる？

問いかけの答えをついに見つけたとき、マンスラムは全身から力という力が抜け落ちるのを感じた。

まさに全身全霊をかけた勝負に、彼女は勝ったのだ。

5

「どこだ？」

村長から提供された近隣の地図をテーブルに広げながら、そう尋ねたのは破妖剣士であるイズヴァンだった。

問いかける相手はチェリクだ――霊迦を行使したマンスラムは現在、極端な疲労のため深い眠りについている。

代わりに彼女が意識を失う寸前に洩らした言葉を、チェリクが代弁している。

「暗い岩室、水の流れる場所、苔の臭いがする、ひんやりしているけれど寒くはない……深い洞窟でしょうね。地下水が流れているか、地上からの水が滴っていて、苔が生えている。多分年間を通じて、気温差があまりない……」

マンスラムが残した言葉から、チェリクはその場所の条件を組み上げていく。

豊富な知識と回転の速い頭脳なくしては、その作業はかなわないが、イズヴァンは感嘆する様子も見せず、ただちらりと背後に控える村長に目を向けた。

「条件の合う場所はありますか？」

それまで、言葉もなく――正確に言うなら、二人の気迫に呑まれて声も出せなかった――村長が、こくこくと頷いた。

マンスラムが示した奇跡のような情報、それを迷いなく組み上げるチェリクの判断力、そしてそれを微塵も疑わないイズヴァンの態度。

その全てに、彼は圧倒されているのだ……最早彼の脳裏に、破妖剣士たるイズヴァンのそばに控える可憐すぎる少女たちが、本当に浮城の住人なのか否かを疑う余裕はないだろう。

魔性を相手取るために、必要な力は豪腕とは限らない。

そのことを、村長は最早疑うことはない。

華奢な少女たちが見せた驚異的な力を前に――チェリクの場合はほんのかけらに過ぎないのだが――村長の目には、明らかな畏怖が宿っていた。

それが強すぎて、なかなか口が利けない様子であることには気づいていたが、イズヴァンもチェリクものんびり待ってやれる精神状態ではなかった。

「どうなんです？」
「どうなの？」
青年と少女の重なるように放たれた問いかけに、村長は真っ青になりながら、地図のある一点を示した。
「お、恐らく、廃鉱のあるこの山ではないかと……」
聞けば、一時銅が出るということで、山が採掘されたらしいが、三年を待たず掘り尽くされ、後は捨て置かれているのだという。
村長が示した廃鉱は、村から東北東の位置にある。
チェリクが、そちらに目を向け、何かを見据えるようにした。
そのまま、沈黙ばかりが部屋を支配した。それを打ち破ったのは、そろそろ頃合いかと見切りをつけたイズヴァンの、チェリクへの問いかけだった。
「どうだ？」
簡潔を通り越し、事情を知らぬ者には意味不明としか取れぬ問いかけに、答える少女もまた、不親切この上ない言葉を返した。
「どうやら当たり。だけど……厄介なことになってるわ。妖気の塊が寄せ集められてる……浮

城の調査員が下手を打ったらしいわね。相手は完全に巣ごもりに徹するつもりのようよ」

壮絶なまでの美貌を誇る少女が、忌々しげに舌打ちする。

その様子に、最年長の破妖剣士は嘆息した。

「チェリク……」

「駄目よ、イズヴァン。言いたいことはわかるけど、それは駄目だわ。わたしの我が儘のために、彼女にこれ以上の負担はかけられない。あなただって見たでしょう？　わたしのことが大嫌いなのに、それでも彼女はここまでのことをしてくれたのよ？　彼女の心に応える術を持たないわたしが、これ以上彼女の好意に甘えることはできないわ」

はっきり言い切った黒髪の少女を前に、保護者であるはずの破妖剣士はため息で以て応えるしかなかった。

「……お前を拐かした時点で、おれが貧乏くじの全部を引き受けることは約束されてたようなもんだからな……」

まるで、自分に言い聞かせるかのような言葉に、チェリクは罪悪感のかけらも感じさせない笑顔で応じた。

「やっぱり、わたしのこと一番わかってくれてるのはイズヴァンよね」

大輪の薔薇が花開くかのような艶やかな笑顔を向けられた一行最年長の破妖剣士は。
諦めたように息をつくことで、それに答えたのである。

※

体が泥のように重い。
底なし沼に体ごと引きずり込まれて、そのまま永遠の眠りに就いてしまいそうだ。
この感覚には覚えがある、と眠りに囚われたまま、マンスラムは漠然と思った。
どういう時、こうなってしまうのだったか……記憶を辿った彼女は、ほどなく正解にたどり着く。
そうだ……霊迴の術を行使したのだ。
答えを見つけたのに、なぜか新たな疑問が浮かび上がってくる。
なぜ、今さら霊迴の術を？
あの術とは、里を後にした時点で永遠に決別したと思っていたのに——。
本来の道から外れた術の在り方は、マンスラムにとって忌むべきものだった。だから、二度

と用いることはないと思っていた。
けれど――、と思い出した。
そう……二度とあの術にかかわることななないだろうと思った環境で、皮肉にも一番道に則すると思える術の依頼を受けたのだ。
頼んできたのは、自分が大嫌いと思う少女で、間違っても彼女の頼みなんかのために、あんな大変な思いを味わうつもりはなかったというのに。
本人には人間味などかけらもないくせに、頼まれた内容には心を動かされずにはいられないものだった。
だから、仕方なく引き受けたのだけれど――。
ああ、とマンスラムは思った。
これは夢だ――現実の感覚ではない。そうとわかっていても、その元凶となった自分の決断を悔やむぐらいには、この先に待ち構えている光景が、イヤだ。
何度も繰り返したあの悪夢が、三年ぶりに訪れる。
わかっているのに、それを避けることも退けることもできないこの現実が心底イヤだ。心底、本当にイヤなのに……それでも、あの夢はやってくるのだ。

夢に登場するあの少女と同じく、こちらの都合などお構いなしで。
はた迷惑な……。
そう毒づくのが、マンスラムにとっての限界だった。
過去の記憶が、押し寄せる――。

※

チェリクに関して、大きな思い違いをしていたのだと明らかになった瞬間のことは、到底忘れられるものではない。
擬態云々とイズヴァンに言ったものの、心底ではその意味を理解した上で用いてはいなかったのだ。
イズヴァンの言った通り、普通ではない世間知らずなのだろう、とは思った。
思っていた。
だが――。
これは、想定外に過ぎる。

追い詰めたと思った魔性の罠に逆にかかってしまった。
九分九厘の勝利を確信して飛び込んだその先で、マンスラムは絶体絶命の危機に瀕していた。
仕掛けた罠を十二分に読み解き、逆に仕掛けられたのだ。
張り巡らせた蜘蛛の巣のような術中に、相手の魔性をおびき寄せるつもりが……逆にまんまとおびき寄せられ、捕らえられてしまったのだ。
迂闊だったとしか言いようがない。
妖鬼の念で練り上げられた大地がマンスラムの四肢を束縛し、ぎりぎりと締め上げてくる。
鱗で全身を覆われた妖鬼がにたりと笑う。
「お前たち人間は、たやすく先入観に捉われるねえ。あたしがこの通りの見てくれで、沼地を住処にしてるものだから、水の性だと簡単に思い込んでくれる……ほんとにありがたいことだよ。水の性でなくとも、鱗を持つモノは地上に溢れているというのに」
そう言いながら、妖鬼はずるりと汚泥に沈めていた下半身を露にした。
やはり下半身は鱗に覆われていたが、その脚、さらに臀部から伸びる太い尾は、トカゲを連想させるものだった。
妖鬼は、水ではなく大地を支配下に置くことで、これまで狩りを行ってきたのだ！

このことを、同行の浮城の面々は知らない——罠の様子が気になってマンスラムはここにひとりで来たのだ。それでも、本当に様子を見るだけのつもりだった。

浮城では本来、一件の依頼に対して単独で任務にあたる。

今回の依頼で、三人のチームを組むことになったのは、異例中の異例と言える。それは、それだけ相手の魔性が危険であることを示している。そうと知りつつ、単独で動くなど愚の骨頂だ。

マンスラムはいやというほどに、そのことを弁えていた。

けれど——。

罠にかかった妖鬼のそばに、怯えて動けない小さな人影を見いだしてしまった瞬間、体が先に動いてしまったのだ。

子供が——！

その事実に、飛び出してしまった。

それすらも妖鬼の罠だと気づかずに。

「ほんとに、人間って馬鹿だねえ、母さん」

くすくすと無邪気に笑うのは、妖鬼に捕らわれたと思った小さな子供だった。

ぶかぶかの服のせいで、先ほどは気づかなかったけれど、そこから覗く脚にも手にも小さな鱗があり、さらにはマンスラムからは死角となった部分から、太い尾が現れた。

「ぼくがこうやって母さんに捕まったふりをするだけで、人間ときたら面白いほど簡単に飛び込んでくるんだもん」

得意そうですらある子供の妖鬼の言葉に、マンスラムはこの地域の被害の大きさの理由を悟った。

子供が妖鬼に襲われている——そう思わせることで、この妖鬼たちは狩りの精度を上げていたのだ！

卑劣な策だ。

子を持つ——いや、幼い家族を持つ人間であれば、決して看過できぬ罠を、このふたりを仕掛けつづけてきたのだから！

だが、見抜けなかったのはこちらの落ち度だ。

魔性は悪辣な策を用いると、知っていたはずなのに、咄嗟の判断を誤った。

ぎり、と唇を噛みしめる。

その時だった——思いもかけぬ声が、耳を打ったのは。

「そうでもないわよ、黒沃、導蔓」

澄んだ、高い少女の声――。

何度も耳にしたはずのその声には、けれどこれまで聞いたことのないほどの激烈な力が溢れていた。

そう、正しく何者も逃れ得ぬ断罪の――。

名を呼ばれたわけではない自分ですらも、心臓がひやりとした。

「チェ……」

リク、と声にすることさえできない。

その場に現れた黒髪の少女は、妖鬼たちばかりか、マンスラムまでも圧倒する力の輝きに満ちていたのだ！

「視えるわ……お前たちのこれまでの所行が。黒沃、お前に関しては最初の頃に関してだけは同情していいかもしれない。その子を無事に産み落とすために滋養が必要だと思ったからなのだとわかるから……」

ざわり、とマンスラムは全身の肌が粟立つのを感じた。

チェリクは、今、なんと言った？

まるで魔性に共感するような、そんな言葉を口にしなかったか？

マンスラムの混乱など知らぬげに、黒髪の少女は淡々と続ける。

「けれど、その子とともに人間を狩るべきではなかったわ。導蔓は人間はたやすく狩れるものだと思ってしまった。お前も導蔓と組めば、人間を簡単に狩れることを知ってしまった……」

冷徹な絶対者の眼差しで、黒髪の少女は魔性の親子に宣言した。

「お前たちは変わらない。変わらぬまま、快楽のために人間を狩りつづけるだろう……それは決して認められないから、わたしはお前たちの命を解くわ」

厳然と命じる声――それとともに、自分を束縛し、今にも命を奪いかけていた魔性の命が解かれ、宙に消えていくのを感じた。

それは、何という力の奔流であったろう。光を帯びた緑柱石の眼差しが、空間全てを支配し、思うがままに操る。

そんな少女の姿を目にして、マンスラムははっとするものを覚えた。

澄み切った眼差し――何もかもを読み解く瞳は、彼女には覚えのあるものだった。

あれは……チェリクが時折自分に向けるものと同じだ。

気づいた瞬間、ぞっとした。

あんな目で見られていたのか、自分は。あんな、事象そのものを観察し、読み解こうとする意志を宿す目で。

そこに親しみや情愛はかけらもない。

チェリクはずっと、そんなものなしに、自分を見つめていたのだ——何のために？

決まっている。

イズヴァンの出した『宿題』を解くために、だ！

それなりに親しくなったと思っていた。いつかは何もかも話せる友人になれるかもしれないとも思っていた。

だが、それが自分の一方的な思い込みであったのは、最早疑いようがない。

その瞬間、マンスラムはチェリクのことが大嫌いになったのだ……。

6

肩掛けに似た紗を握りしめ、マンスラムは走っていた。

霊迦の行使による疲労はまだ完全に消えていない――そんな身で全力疾走など、我ながら馬鹿だと思うが、それ以上の馬鹿がこの先にいるとなれば、構ってはいられない。

あの、馬鹿……！

意識をなくしたマンスラムを村長の家に休ませるなり、判明した魔性の住処に向かったイズヴァンとチェリクには、怒鳴りつけてやりたいところだ。

馬鹿だ、本当に馬鹿だ。

自分に霊迦をさせながら、肝心なことは聞かないまま、敵中に飛び込んでいくなど、他に呼びようがない。

霊迦は、肉体を離れた魂の在処を突き止めるだけではない。その魂がいかなる状況に置かれ

ているのか、明確に感じ取ることができるのだと、果たしてあのふたりは知らなかったのだろうか⁉

本当に知らなかったのなら、間抜けもいいところだし、知っていても場所さえわかれば問題ないと考えたのなら、救いようのない阿呆だ。

イズヴァンの良識を信じすぎた自分も馬鹿だ。

考えてみれば、チェリクとずっとつきあっていられるという時点で、充分普通じゃないのよ！

チェリクのあの、いつまでも改まらないトンチンカンなところだって、彼に責任がないとは言えない。人付き合いを学ぶのを、宿題などと勘違いさせたあたりで、彼の言い回しにも問題はあったに違いないのだ。

本当に良識のある大人であれば、いくらチェリクが逸ろうと、自分の意識が戻るまで押しとどめたはずだ。

切れ切れの言葉のかけらに満足するのではなく、しっかりと自分から全ての情報を引き出した後、計画を立て、実行に移るべきだった。

そうすれば、マンスラムは後はふたりに任せて、心置きなく休むことができたのだ！

大技使って疲労困憊してるわたしを走らせるんじゃないわよ！
息を切らしながら、彼女は馬鹿なふたりの同行者を胸中で罵倒して罵倒して罵倒しまくった。
もちろん合流したら、思う存分声に出してたたきつけてやるつもりだ。
ぎゃあぁぁっっ！
獣とも人間ともつかない叫びが聞こえてくる——少なくとも、イズヴァンの居場所はそれでわかった。破妖刀で、集まった小鬼と戦っているのに違いない。
本当に、あのふたりは馬鹿だ。
何のために、自分を呼んだというのか——利用するつもりなら、とことん利用してみせろと言いたい。
「……馬鹿、なんだから」
呻くような声を洩らして、マンスラムは紗を握りしめた——。

※

「馬鹿ですか、あなたがたは！」

問題の廃鉱の入り口で、複数の小鬼を相手に戦っていたイズヴァンは、突然かけられた声に、一瞬固まった。

覚えのある声に顔を向ければ、顔を真っ赤にした亜麻色の髪の少女が、肩で息をつきながら立っていた。

半日は眠り続けるだろうと思っていただけに、驚かされた——だが、それ以上に意外だったのは。

「わたしを待たずに先走るから！　こんなところで、使わなくてもいい体力を浪費することになるんです！　わたしの霊迦が必要だと言ったくせに、術の内容を理解していないだなんて、ふざけるにもほどがあるわ！」

怒りに震える声が、何気に失礼な言葉を連ねるのを、イズヴァンは呆然と聞いていた。

亜麻色の髪の捕縛師——霊迦という異能を併せ持つ少女は、礼儀正しく穏やかな気性の主だと認識していたが、とんだ激しさを隠し持っていたらしい。

だが、そんなことに感心していられたのは一瞬のことだった。

それまでイズヴァンのみに敵意を向けていた小鬼たちが、一斉にマンスラムを振り返ったのだ！

まずい――このままでは、彼女に小鬼が殺到してしまう！

「逃げろ！」

霊迦が気力と体力を消耗する術だということは知っている――いかに有能な捕縛師でも、今の彼女に複数の小鬼を相手取ることなど無理だ。

だが、イズヴァンの叫びを、あろうことかマンスラムは鼻で笑ったのだ。

「馬鹿を言わないでくださいな。何のためにわたしが駆けつけたと思っているんです。できることがあるから、来たんです」

言い切るなり、彼女はその手に持っていた紗を広げた。

幅狭な肩掛けぐらいのそれは、彼女の肩にかかるなり、淡い光を放ち始めた。

「わたしが霊迦師の一族の生まれであることはご存じでしょう？　即座に浄霊できない場合に備えて、いろいろ工夫して道具とかも作っていたんですよ。この霊纏布も、そう……」

光を放つ紗を纏い、マンスラムは小鬼たちに目を向けると、イズヴァンに対するのとは打って変わった、穏やかな声で語りかけた。

「先ほど逢ったことを、覚えているでしょう？　あの時、確かに約束したわね、きっと行くべき場所への道を教えてあげると。約束を果たしに来たの。ただ、もう少し準備が必要だから、

少しの間、ここで――」

そう言って、彼女は紗に優しく触れる。

「休んでいてちょうだい。そんなには待たせないから」

優しく慰撫するような声音に、小鬼たちの目から敵意が消える。

そうして――彼女の声に誘われるまま、小鬼の内側から、仄かに光るモノたちが溢れだした。

イズヴァンは、今度こそ呆然とした。規格外の存在は、被保護者である少女で慣れていると思っていたが、目の前の少女もそうだとはついぞ考えつかなかった。

そうして、この一連の流れのなかで、彼は気づいたことがある。

つまり、あの光は妖鬼によって殺され、囚われた人間の魂なのだ。遺体が異形化したのは、無理矢理小鬼の中に封じられたせいと考えられる。

先ほどの短い時間で、マンスラムはそのことまでも突き止めていたのだ。

「驚いたな」

知らず、声が洩れた。

光を残らず霊纏布に宿した少女が、冷ややかな声で答えた。

「後にしてください。魂が抜けた以上、この小鬼たちはただの寄せ集めですが、万が一にも中

に入って来ないようしてくださいね」
常の彼女からは想像もつかない、強い口調で言い切ると、マンスラムはそのまま、廃鉱の入り口に向かって歩き出した。
その奥に何があるのか、確信しているのだろう少女を、イズヴァンは敢えて止めなかった——。

※

暗い廃鉱の中を、マンスラムは迷いのない足取りで進んで行く。
霊纏布の放つ仄かな光のおかげで、足下に気をつけずにすむのはありがたい。
奥から叫ぶ声が聞こえるから、迷う心配もない。
この先に、元凶の妖鬼とチェリク——そしてもうひとつの命がある。
今回の悲劇の引き金となった、小さな小さな命が。
その命のために、あの少女は事を急いだのだ——。

※

「駄目よ、芙葉……あなたを見逃すことはできないわ」

赤子を抱きしめ、燃えるような目で睨みつけてくる妖鬼に向かって、チェリクは言い放った。

「その子のためにも、それはできない。その子のために、仮にあなたが心を入れ替えるとしても、これまでに出た犠牲が多すぎる」

淡々とした口調で告げながら、チェリクは胸に痛みが走るのを感じた。

全身の半分ほどを樹根のようなものに覆われた妖鬼と抱かれた赤子の向こうに、別の姿が重なって見える。

李枝……。

かつて喪った養い親にも等しい妖鬼――全然似ていないというのに、どうしても重なってしまう。

それも仕方のないことだ。これは、目の前にいるのは、過去の自分と同じモノだ。

妖鬼に愛され、育てられる子供――だからこそ、放ってはおけない。このままでは、あの子供は自分と同じ思いを味わうことになる……そんなことにはさせられない。

「拾った人間の子供を、殺さずに育てる気になったのは、あなたが子供を喪ったからね。我が子の代わりに、その子を育てようと思ったのね。そのことを責めるつもりはないけれど、それでもあなたは間違っていた。人間の子供は人間の中で育てられるべきなの。あなたはその子を村の外れにでも置いてくるべきだった」

そうすれば、赤子は村人によって育てられることになったろう——裕福とはいえないが、今回浮城に依頼するだけの蓄えを持っていた村だ、見殺しにはしなかったろう。

だが、芙葉はそうはしなかった。

喪った我が子の代わりに得た赤子を、決して手放そうとしなかったのだ。

子供を喜ばすために、人間の魂で玩具を作り、不穏な気配を感じてからは、子供を奪われないために、さらに人間の魂を狩り、守らせるために小鬼に封じた。

チェリクのために、他人を平気で犠牲にした李枝と全く変わらない——それでは駄目なのに。

それでは赤子も芙葉も、幸福にはなれないというのに。

「目の前で親が死ぬ姿を見るのが、どれほど辛いか……あなたにはわからないでしょう、芙葉。けれど、あなたがその子を手放さない限り、早晩その時が来るわ。だから、わたしが来たの。一刻も早く終わらせるために」

この子の記憶に、芙蓉の死が残らないですむうちに——芙蓉の所行を考えれば、ふたりを見逃すわけにはいかなかった。

だが、そんなチェリクの思いは、芙蓉には伝わらない。

「何も知らぬ小娘が、何を抜かすか！　わたしはようやくこの子を得たんだ。この子だけは絶対に奪わせないんだ！　そのためなら何だってやってやるんだ！」

咆吼にも似た叫びに、再び胸に痛みが走るのを感じた。

「大体、偉そうに言える義理か、浮城の魅縛師！　お前、その瞳でこれまでどれほどわたしの仲間を従えて好きにした⁉　その目を見ればわかる……数え切れないほど、殺してきたんだろう！　わたしがこの子を守るために人間を狩るのは悪くて、お前がわたしたちを狩るのは構わないのか！　そう信じているのだとしたら、お前は思い上がってるよ！」

言われるまでもなくわかっている——自分が傲慢だということなど。

それでも。

「その子を、わたしのように人間の心のわからない子供にするわけにはいかないの！」

叫びながら、チェリクは魅了眼を発動させた。

絡まり合った糸玉のように見える……芙蓉の命。その数は三——同時に解いていく。

「何を言ってる……お前？　この子はわたしと一緒にいるんだ。人間の心なんか理解する必要は……」

「必要はあるの、終わりは必ず来るのだから……わたしは十で李枝を喪ったわ。それでも後を追うことはできなかった。李枝が、生きろと言ったからよ。あなたは自分が死ぬとき、その子にともに死ねと言うつもりなの？」

チェリクの問いに、芙葉は答えなかった――答えられなかったのかもしれない。

だが、納得していないのは明らかだった。

「我らに育てられたくせに、お前は我らを狩ってきたのか！　とんだ恩知らず、恥知らずだ！　お前は人間の心がわからないんじゃない、心そのものがわからない化け物なんだ！」

苦し紛れの糾弾に、しかし答えたのはチェリクではなかった。

「勝手に決めつけないでちょうだい」

振り返るまでもなく、それが誰かはわかっていた。

だからこそ、驚いたのだ。

「そこの馬鹿には、これからしっかり人付き合いというものをたたき込んでいかなくてはならないのに、変な先入観を植え付けないでほしいわ」

チェリクの告白の内容が、聞こえなかったはずはない。
なのに、マンスラムは平然と自分を馬鹿と言ったのだ。
なぜか目頭と胸の奥が熱くなった。
そんなチェリクの様子に気づいたのかどうか――マンスラムの言葉は続いた。
「何ぼんやりしているの。外の魂は全部回収したから、後はあの子を保護するだけよ。そのために来たんだから、しっかり働きなさいな」
もちろん、チェリクもそのつもりだった――。

エピローグ

後日、浮城の菜園に、無事に帰還を果たしたふたりの少女の姿があった。
「大体、上っ面だけなぞって、学んだ気になってるから身につかないのよ」
分厚い軍手をはめた手が、雑草を一本ずつ丁寧に抜いていく。
手慣れた様子で次々と雑草をむしっていくのはマンスラムである。
一方――。
「そんな言い方はないでしょう？　学ぶは真似ぶから来たと聞いたことがあるわよ」
真新しい軍手で、チェリクは文句を言いながら雑草に手を伸ばす。
マンスラムの手つきを真似て引っ張ったつもりだが、根本でぷつんと切れてしまう。
浮城は原則自給自足だ――そこに住まう者は菜園管理や狩猟に半強制的に駆り出される。
チェリクがこれまでそれらを免除されていたのは、彼女が別の形――護り手獲得――で務め

を果たしていたからだ。

異質な彼女を下手に皆と交わらせることに、彼女の保護者たるイズヴァンが危機感を抱いたせいとも言える。だが、先日の事件が解決した後、マンスラムはイズヴァンに直談判し、チェリクを菜園管理の作業に引っ張り出したのだ。

彼の懸念は確かにもっともかもしれないが、このままではチェリクは浮城で浮いたままの存在で在り続けると確信したからだ。

そうして、引っ張り出したチェリクは——一切の経験がない以上、無理からぬことではあったが……役立たずだった。

「下手ねえ。真似もできていないじゃない。真似るにしても、常に頭を使わなければ意味がないのよ。無駄に頭がいいんだから、ちゃんと使いなさいな」

容赦のない辛辣な口調は、最近では日常化している。

人間そのものに未だ慣れていないチェリクは、曖昧な言葉の裏を汲み取ることが不得手だからだ。

人間は生まれた瞬間から人間なのではないというのがマンスラムの持論だ。赤子は成長する過程で、周囲の者たちの言葉や反応を真似し、学習して人間になっていくのだ。

幼少時を妖鬼と過ごしたチェリクには、その基礎ができていない。

そうである以上、曖昧なやりとりは、彼女を混乱させるだけだ。現に彼女は周囲の上っ面の反応だけを真似した結果、自分に対して馬脚を露した。基本から徹底的にたたき込まなければチェリクは人間の亜種で終わってしまうだろう。

それはイヤだと、マンスラムは思ったのだ——あの廃鉱の奥、妖鬼と赤子を前に叫んだ彼女の想いは、決して人間ならざるものだとは思えなかったから。

一方、チェリクはチェリクで、マンスラムの変化に困惑していた。

イズヴァンに言われて彼女の言動を観察していた頃には見えなかった、意地悪でさえある彼女にいいように振り回される。

わからないことだらけだ——以前のマンスラムには感じたことのない謎が溢れている。けれど……よくわからないけれど、自分を貶しながら見せてくれるマンスラムの言動の数々は決して不愉快ではないのだ。

「マンスラムは楚々とした百合のような人だと思っていたのに、実のところは棘だらけなのね」

精一杯の皮肉を繰り出すが、今回も成果はなかった。

「三年も観察しておきながら、今さら言うことがそれなの？」

澄ました顔で受け流され、チェリクは悔しいのでひとまず雑草むしりに専念することにした——。

事情を知らぬ者は浮城の白百合紅薔薇と、ふたりをよく知る者たちは白薔薇紅薔薇と、密かに呼び評されたふたりの少女の真実の親交は、こうして始まり、深められていったのである。

あとがき

この本が発売される頃には秋の気配も深まっていることと思いますが、皆様いかがお過ごしでしょうか。

こんにちは、前田珠子です。

『鬱金の暁闇』第十四巻をお届け致します。

この本が私のコバルト文庫通算百冊目にあたる本だと聞いて、感無量です。

ここまで書き続けられたのは、関係各所の皆様のご尽力と、何より読み続けてくださった読者のかたがたのおかげです。

この場をお借りして、全身全霊の感謝を伝えられたら、と思います。

さて、前巻のあとがきで「巨大な山の一つ目をクリアしました」とか書いてしまいましたが、本当の意味でクリアし終えたのは今回でした。

次巻からは最終決戦及び、いろいろな意味での最終戦が押し寄せてくる予定です。

一冊では到底まとまりそうにはありませんが、それでもラストは近いです。

どうか、最後までおつきあいください。

近況です。

以前、猪にかアナグマにか根こそぎほじくり返されていた春蘭を保護したことをあとがきに書いたと思います。

その春蘭が無事に新芽を出し、根も増やしたのを確認できたので、先日山に返しました……「無事に根付いて元気に育ってね」と声をかけて植えたのに——数日後、その場を見に行ったらアナグマの仕業か、猪の仕業か、再び綺麗にほじくり返されていました。

どうやらミミズや虫の幼虫目当てに、腐葉土の多い場所はほじくり返されるみたいです。

いたちごっこという言葉の意味を身を以て味わわされた出来事でした（因みにその春蘭は少し場所を変えて再移植しました）。

今回もイラストの小島榊様をはじめ、多くの方のお世話になりました。

これからも、どうかよろしくお願い致します。

それでは、また次の本でお会いできることを願いつつ、筆を擱かせていただきます

平成二十四年　秋　　前田珠子

※この作品はフィクションです。実在の人物・団体・事件などにはいっさい関係ありません。

まえだ・たまこ

1965年10月15日、佐賀県生まれ。天秤座のB型。『眠り姫の目覚める朝』で1987年第9回コバルト・ノベル大賞佳作入選。コバルト文庫に『破妖の剣』シリーズ、『カル・ランシィの女王』シリーズ、『聖獣』シリーズ、『聖石の使徒』シリーズ、『天を支える者』シリーズ、『空の呪縛』シリーズ、『ジェスの契約』『トラブル・コンビネーション』『陽影の舞姫』『女神さまのお気の向くまま』『万象の杖』『月下廃園』など多数の作品がある。興味を覚えたことには積極的だが、そうでない場合、横のものを縦にするのも面倒くさがる両極端な性格の持ち主。趣味と実益を兼ねてアロマテラピーに手を出したものの、今ではすっかり実益のほうが大きくなり、趣味とは言いがたくなりつつある。次こそは優雅な趣味を持ちたいと身の程知らずにも思っている。



——破妖の剣　6——
鬱金の暁闇14

COBALT-SERIES

2012年11月10日　第1刷発行

★定価はカバーに表示してあります

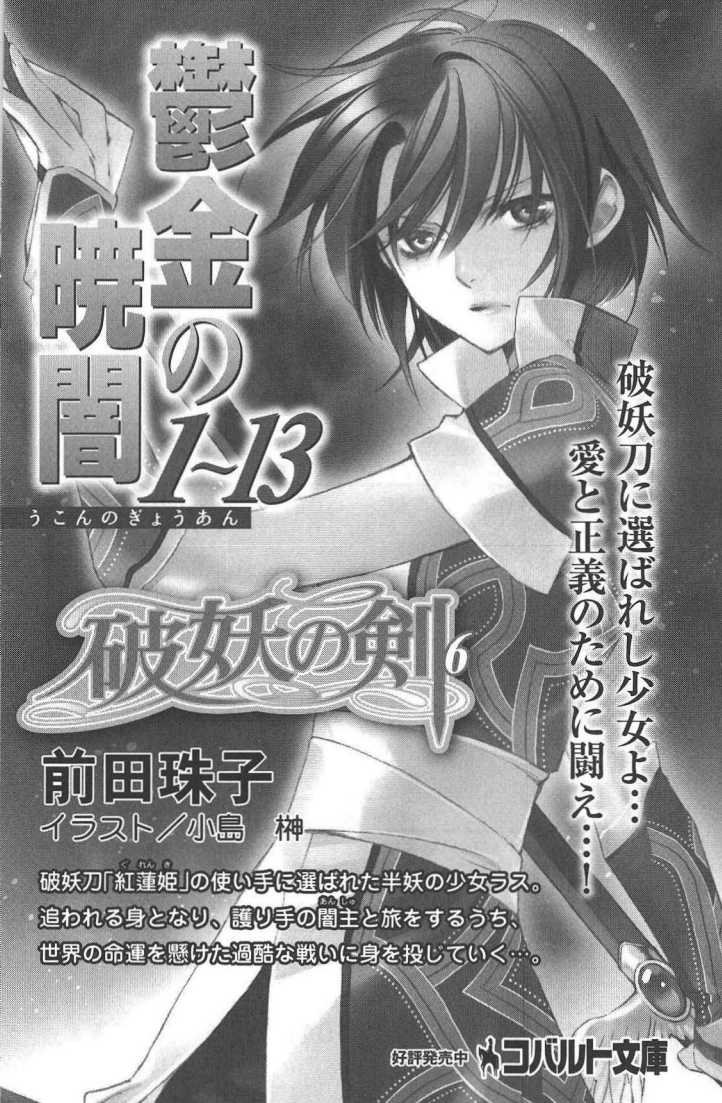
著者　前田珠子
発行者　鈴木晴彦
発行所　株式会社集英社

〒101－8050
東京都千代田区一ツ橋2—5—10
(3230)6268(編集部)
電話　東京(3230)6393(販売部)
(3230)6080(読者係)

印刷所　大日本印刷株式会社

© TAMAKO MAEDA 2012　Printed in Japan
造本には十分注意しておりますが、乱丁・落丁（本のページ順序の間違いや抜け落ち）の場合はお取り替え致します。購入された書店名を明記して小社読者係宛にお送り下さい。送料は小社負担でお取り替え致します。但し、古書店で購入したものについてはお取り替え出来ません。なお、本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。また、業者など、読者本人以外による本書のデジタル化は、いかなる場合でも一切認められませんのでご注意下さい。

ISBN978-4-08-601676-6 C0193


耽美幻想
黄金の暁闇
1~13
うこんのぎょうあん
破妖刀に選ばれし少女よ…
愛と正義のために闘え…!
破妖の剣 6
前田珠子
イラスト／小島 榊
破妖刀「紅蓮姫」の使い手に選ばれた半妖の少女ラス。
追われる身となり、護り手の闇主と旅をするうち、
世界の命運を懸けた過酷な戦いに身を投じていく…。
好評発売中
コバルト文庫


破妖の剣 外伝
珠玉の超(スーパー)ファンタジーに酔いしれよ!!
言の葉は呪縛する
義父レンバルトを密かに想う少女リエンカ。ある夜、レンバルトの秘密を知ったリエンカは…!?
紅琥珀(こうこはく)
異形を仮面で隠した人々が棲むアルバフヌの里で、逃走中のラスと闇主は…!?
前田珠子
イラスト／小島 榊
好評発売中 コバルト文庫


まんが版
破妖の剣
三
～霧魔の谷～
[漫画]松元陽
[原作]前田珠子
収録作品:破妖の剣
定価／440円(税込)
マーガレットコミックス
逃亡中のラスと彼女の護り手
闇主――旅の途中で
魔性に苦しむ人々に出会った
彼らは、力を発揮せずには
いられずに……!?

好評発売中!


前田珠子
イラスト／山本鳥尾
聖石の使徒
シリーズ
選ばれし子供たちが、世界を守る――!!
其は焔をまとう者
其は力を放つ者
其は天秤をかざす者Ⅰ・Ⅱ
其は水に遊ぶ者Ⅰ・Ⅱ
揺籃の瞳
蒼の組木箱
狩人の爪
狩人の覚悟
狩人の宝
コバルト文庫
好評発売中



海の娘が生まれるところ

山本 瑤 イラスト／山本鳥尾

歳の離れた弟が事故で死んだ。母は塞ぎこみ、遠因となった蒼子(そうこ)を疎んじている。もし弟が戻ってくるなら命なんて惜しくない…。そう考えるうち、いたたまれなくなり家を飛び出した蒼子は、不思議な少年と出会う。彼に導かれ辿り着いた先は生と死の狭間の国で…。

好評発売中 コバルト文庫



求婚許可証（プロポーズ・ライセンス）いりませんか？

榎木洋子 イラスト／カスカベアキラ

見習い魔女ルーチェは、雨の夜に記憶喪失の青年を拾った。ライルと名乗った青年は、変装姿でいかにも訳あり。翌日には名前も忘れてしまっていたが、驚くほどの美青年！ しばらく一緒に過ごすことになった２人だけど、ある日、ライルがルーチェにキスをして…？

好評発売中 コバルト文庫



恋の翼を手にいれて☆
騎士との恋は突然に？

かたやま和華 イラスト／旭炬

ルミアは、幼なじみのジョルニから冗談か本気かわからないプロポーズを受けた。その日を含めて通算109回になるプロポーズをいつものようにスルーしたとき、美形の騎士が突然現れ、ルミアに求婚してきた！ しかもこの騎士、ルミアが実は王女だと言い出して…!?

好評発売中 コバルト文庫


2011年度
ノベル大賞
読者大賞
受賞作家デビュー!!
コバルト文庫
好評発売
アクマでメイドなラブコメディ♥
ゴシック・ローズ
Gothic Rose
悪魔の求婚
小糸なな
イラスト／明咲トウル
ある理由でメイドの仕事が長く
続かないローズ。次こそはと
意気込んだお屋敷で、初対面の
ご主人様からプロポーズされて!?

好評発売中 コバルト文庫

2011年度 ノベル大賞 大賞受賞作家 デビュー!!

ロスト・グレイの静かな夜明け

a silent daybreak of lost gray



死から目覚めた少女の希望と再生の物語…!

不運な事故に遭ったアズサが目覚めると、そこは心残りを抱えた死者が行き着く世界だった。傍らにいた少年に案内され辿り着いたのはある退廃的な町で…。

野村行央

イラスト／竹岡美穂



毒舌姫と黄金の慈雨

せひらあやみ イラスト／くまの柚子

王女として正式に社交界デビューしたクリスタは、独特の洗礼に辟易してばかり。さらに、最近人気の占い師に「婚約は不吉の象徴」と宣告され、それを裏付ける事件が頻発して…？

〈毒舌姫〉シリーズ・好評既刊

毒舌姫と精霊の祝福

好評発売中 コバルト文庫



氷室冴子
イラスト／今 市子

コバルト文庫
好評発売中

永遠のベストセラー作家、氷室冴子の
文庫・単行本未収録作品がついに刊行！
表題作『月の輝く夜に』ほか、『少女小説家を殺せ！』
『クララ白書番外編　お姉さまたちの日々』、
そして文庫・単行本で134万部の大ヒットを記録した
『ざ・ちぇんじ！』を一気に収録。

9784086016766

ISBN978-4-08-601676-6

C0193 ¥510E

1920193005103

定価 本体510円＋税



コバルト文庫

ラスの迷いが消えた。魔性と人間の軋轢のなかで、苦しむ魔性の声にも、軋む人間の声にも共感を覚えてしまったから…！　呪縛から解放されたラスは、父の心臓に紅蓮姫を突き立てる…！　遂に訪れる、第六の妖主「雛の君」との闘い!?　ラスはターラの命を救うことができるのか…!?　そして、この恐ろしくも愛しい世界の滅亡を止めることはできるのか…!?　シリーズ最高のクライマックス！